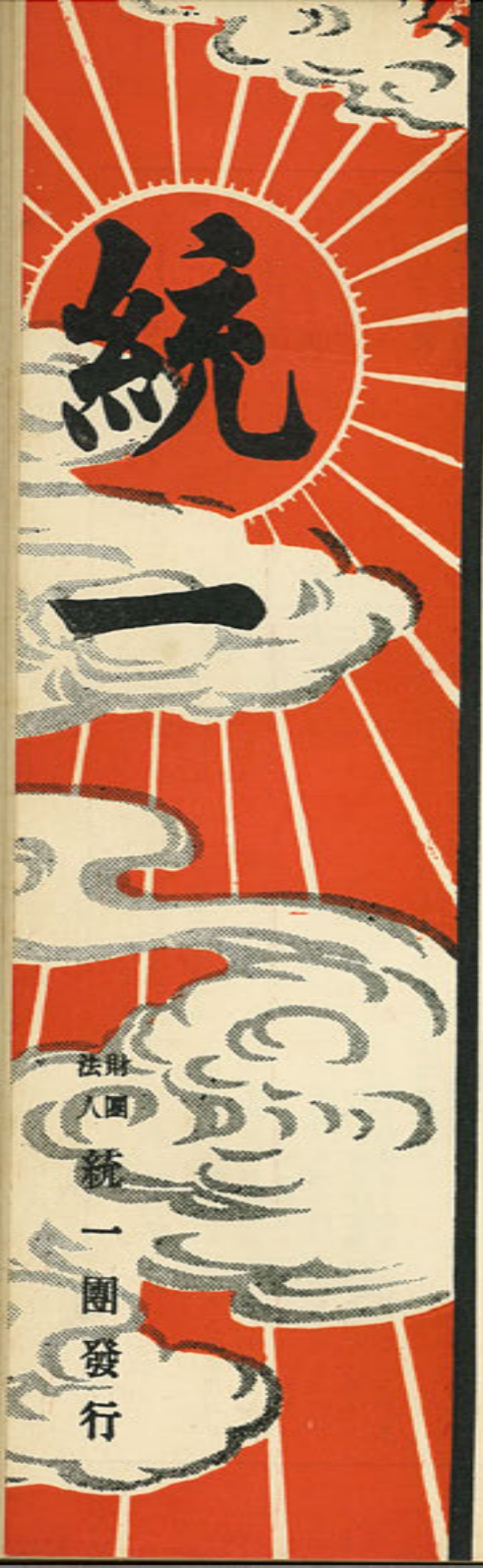

目次

日蓮主義（前篇）……日生上人
日蓮教學講座（第十一回）……河合陟明
日本精神運動と聖日蓮（上）……和賀義見
東郷元帥（和歌）……大八木義雄
法華經講話（第八講）……小林一郎
記事と教報
○寄附團費誌料領收

第三十九年八月號

財團法人 統一團趣意

統一團ハ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サヾル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ産出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法思國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン　又著述出版ニ於テハ大藏經要義　法華經要義　日蓮主義精要　聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス　其中心ノ事業ヲ擧グレバ

第一 佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事　**第二** 我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事　**第三** 此ニ適當スル學風ヲ振起スル事　**第四** 時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事　**第五** 小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツヽ嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事是レナリ

教旨ノ正明　研學ノ潤達　活動ノ旺盛

此等ハ統一團ノ標語ナリ

笹ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ　希クハ同感ノ士女奮ツテ賛同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

本團略則

◎**目的**　本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ講明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ樹立ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌『統一』ヲ發行ス

◎**維持員**　本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ年年金拾圓以上ヲ寄附セラルヽ方ヲ維持員トス

◎**賛助員**　一時金百圓以上又ハ年年金五圓以上ヲ寄附セラルヽ方ヲ賛助員トス

◎**正團員**　一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ醵出セラルヽ方ヲ正團員トス

◎**入團**　御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス

◎**誌友**　統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

日蓮主義

日生上人

本日は東京市内の日蓮讃仰學生大會でありますから、例會の聖訓要義は今日はお預りに致しまして、別に『日蓮主義』と題して一場の講演を致す考へであります。

日蓮主義の名は最早殆ど我國には行亘つたやうな有樣でありまして、今更日蓮主義と題して御話する必要もない程に相成つて居りますが、但し今日申述べようと思ひますことは、其日蓮主義の中の或方面に關して少し感じたことがありますす故に、それを申さうと思ふのであります。

それは第一日蓮主義は『精兵主義』であると申したいのであります。精兵主義とは軍隊が戰をする場合に尤も精鋭なる兵隊を以て戰はなければ、數ばかり多くとも弱兵では戰の目的を達することが出來ない。かの歐羅巴の戰爭は多數の兵を使つて精兵主義と云ふよりは寧ろ多くの數で以て他を屈服せしめたやうなことでありますけれども、私は何處までも戰は精兵主義でなければならぬと考へます。

今日我國の思想界を侵しつゝある種々の惡思想を擊退する、若くは其等の思想の爲に動搖を受けない

と云ふに就ては、此國民を教化して參ります上に於て、唯だ何となくボンヤリした意味で修養を積ます例へば二宮主義によつて人は錢を儲けると共に多少は道德の觀念も持たなければならぬ、儲けた錢を皆使つてしまつてはいかぬから分度の制を設けて積んで行かなければならぬと云ふやうなこと、或は講談師によつて日本の昔の武士道の一端を話さす、大和魂は飽くまでも義勇の心であると云ふやうなことを聽かす。其他種々修養の導きがあるやうでありますが、私は左樣なことは今日の我國民を教化する上に於ては、甚だ面白からぬ方法であると思ふのであります。

又宗教と致しましても信心しないよりはして居る方が宜いぢやないかと云ふやうなこと、佛教の信者などは先づ何をやつても佛教の味方ぢやないかと云ふやうな議論、生温いやうなことでもそれを認めようとする所の思想、丁度軍隊に例へて見れば、先づ弱い兵隊でも敵ではないのである。味方の爲に兎に角働く所の者であるからと云ふやうな意味で數多く並べて置く、それは戰が激烈でない場合は弱兵と雖も宜いと思ひますけれども、戰が猛烈になつて參りますれば弱卒は寧ろ足手纏のことであらうと思ふ。戰に於て弱卒が逃げるが爲に敵の氣勢は大に昂つて敵軍の士氣旺盛になり、我軍は弱卒が逃げるが爲に他の勇壯なる兵隊までも士氣が崩れるといふことになつて、必ず戰爭に於て弱い兵隊を使うたが爲に、全軍遂に敗北をするといふことがあるのであるからして、今、日本の國民の思想を堅實にすべき思想界の戰といふことから考へますれば、左樣な薄弱な宗教の信仰と云ふか間に合せな修養といふことは役に立たないものであると私は考へるのであります。

尙もう一つ考へて見なければならぬことは、縱令其通常の人格が出來て居りましても、中心の主義が明確でありませんければ、其幾多の人格は却つて害をなすやうなことがありはせぬか、其人は勤勉でもあり、忍耐でもあり、柔順でもあると云ふやうな色々なことがありましても、其人の思想の中心と云ふものが確立せぬ限に於ては、其人格といふものは役立たぬものになりはせぬか。例へば足利尊氏が九州に落延びた。それが再擧を圖る時分には九州男兒の人格に色々美點があつた、或は剛勇であるとか、精悍であるとかいふやうな九州男兒の美點があつた爲に、尊氏を助けて十三代の基を開かせ、南朝の忠臣正成をして湊川に自刄せしめなければならぬやうになつた。尊氏の仕事は勝利であつたけれども、其結果は我國の歷史をして慨嘆すべき事蹟を貽したのである。是は寧ろ九州男兒の人格が惡く、卑怯で、臆病で逃げて呉れゝば宜かつたのに、彼等が剛勇なりし爲に遂に南朝の忠臣をして自刄せしむるに至つたのであります。今日の時代に於ては其人の人格が非常に勇氣があるとか、或は自分の事を棄てゝ人の爲に働く、自分の事は考へないが他の人の爲に努力するといふことがありましても、中心に信奉する所の主義信念、此思想の根本が正しくなかつた時には他の事柄は全部信賴するに足らないものであると思ふのである。

茲に於て私之を思想の戰の上から考へる時には飽くまでも精兵主義でなければならぬ、生はんぢや

くの修養や、生はんぢやくの宗教などに依つてやつて居る者は、猛烈なる思想が現れて來て勞働問題が起つた、此勞働問題の爲に人心が動搖を始めたと云ふ時にどう解決をして宜いか分らない。今勞働運動に從事して居る人が必ずしも惡いのぢやない。色々やつて居る所には美點もあらうけれども、それがどういふ間違を起すかと先々を見透して研究致しますと、其處に容易ならぬ問題が横つて居る、日蓮聖人は淨土門が最初起る時に法然が書いた『撰擇集』といふものがある、無論是は惡いものであつて、阿彌陀如來を信ずるに就ては釋迦も棄てるが宜い、天照皇大神も棄てるが宜い、法華經も棄てるが宜い一向專念南無阿彌陀佛を念じ、他の凡ゆるものを棄てゝ一向宗の基を開いたのであるが、其思想は無論惡い事でありますけれども、それを攻擊する所の『彈撰擇集』と云ふ撰擇集を彈劾した所の書物が出たが議論が薄弱である。所謂弱兵であるが爲に其攻擊を打破つて淨土門は大に勃興した、日蓮聖人が之を慨いて居る。薪に少しばかり水をやると却つて火の手を揚げる、惡い思想が現れた時に弱い議論を以て當ることはいけないと云ふことは、守護國家論の中に日蓮聖人が論ぜられて居る、所謂日蓮聖人は精兵主義であると思ふ。

それから又或時に聖人倩ら仰せらるゝには獅子は兎を獲るにも全力を注ぐと言はれたのであります、對手が兎であるから座睡半分で宜いと云ふことはない。獅子は敵が虎であらうが、獅であらうが、兎であらうが、敵に向ふ時には同じく全力を擧げて之を搏つ、虎に向ふ時は非常な力を出すが、兎である

から力を出さぬといふことはない。敵は弱しと雖も尙且全力を注いでやる、日蓮主義は斯の如しと云ふことは聖人が言つて居られますが、今日の思想問題は何でも宜いぢやないか、危險思想でない限は是は味方である、惡い事を言ふのではないから斯ういふことも宜からうと云ふやうな生温いことは私宜くないと思ふのであります。それで今日の我思想界に於て最も重大なることは只今申す根本の思想問題であります。

唯だ其人が忠實であるとか、勤勉であるとか、貯金をするとかさういふことでは駄目である。それは其事だけは惡い事ではありませんけれども、幾ら貯金して置いても眞中の思想が一寸横向けば積んで置いた金が惡い事を助ける。何處までも中心の思想を的確にして置く。これ程今日大事なことはない、此意味に於て私は、今日色々な主義が現はれて居り、色々の思想善導の議論が現はれて居る其中で日蓮主義が最も正確な堅實な思想である。故に私は今日日本人を導くには、日蓮主義ならざるべからずと云ふ斷定をするのである、そこが非常に私は日蓮主義者諸君の自ら任じて立たなければならぬ所であらうと思ふのであります。一寸其事に就ての例を擧げて見ますれば一方に人道主義が現れて來る、一方に國家主義を取つて居ると云ふ場合に、此國家主義を奉戴して居る者が、其内容に於て甚だ貧弱なる考を持つて居る、唯だ國と云ふものは大事であると斯う考へて居る、一方人道主義を取つて居る者は、國々と云うた所がさういふものは一個の形式ぢやないか、素是れ生きて居る所の人間全體の多數の幸福が大

事ぢやないか、だから吾々は人道主義に依つて多くの人の幸福を圖らうと思ふのである、君の言ふ國家は時に依れば人の國を侵略したり、泥棒をやつたり、惡い事をするのが多いぢやないか、世界の國々に就て歴史を見たならば國が榮えるのは他の國を侵略して泥棒の大きなことをやるのである。だから國家主義よりは我輩は人道主義の方が宜いと思ふ、だから萬國主義が宜いと思ふ、斯ういふことを言ふ。所が國家主義が今まで根柢がついて居らぬからヨロ〳〵する、ヨロ〳〵する所の弱兵で國家主義が出て行くから、向ふに於て人道主義なら人道主義が猛然として力を得て來る、すると其裏に隱れて社會主義なら社會主義が、乃公も矢張人道主義であると云うて出て來る、さうして人心が動亂するのである。故に從來稱へて居る所の事も其ものが直に惡い譯ぢやないが、國家觀念なら國家觀念を打込むに就ではどういふ理由を以てどういふ根柢に立つてどういふ内容を有して居る、どういふ活動を爲すものであるかといふことを國家主義に於ては最も正確にしなければならぬのである。其場合には色々從來唱へて居つた儒教から來た國家主義、或は『神道』で教へて居つた國家主義、或は西洋の學問から來る國家主義に於て、眞に今日の人道主義を指導する内容のある國家主義があるか、殆ど見當らない。國家は何の爲に構成せられて居るかといふことは、無論我國の根本より其事は明白になつて居る譯であるが、神道者流の國家主義はたゞ日本ばかりえらいといふのであつて、何の爲に日本がさばかり尊いのであるかといふ内容が明晰になつて居らぬ。又西洋の學問をした人の言ふ國家は我國の國家の事情に合しないやうな考

が多いのである、矢張國家とは其國民の安寧幸福を保全する爲であるといふやうな風であつて、非常に國家の觀念が實利的の方に傾いて居る、現在我國の政治家の多くの考へて居ることも、亦一般の人の考へて居ることも、國家觀念は團結して内部の幸福を保全する爲である、内へ向いた幸福は持つて居るけれども、外へ向いて國家が如何なる事を爲すのであるかと云ふことになると甚だ明晰を缺いて居る。

所が日蓮聖人の國家主義は立正安國で、國を護り立てゝ行く根本は正しき教である。國家は骸骨である、其中に教が無ければ何にもならぬ、法は體なり國は影なり、法を取れば影法師である、故に空つぽの國家を主張することは日蓮主義に於ては初めより無いことである。何處までも日蓮聖人は先づ國家を祈つて須らく佛法を立つべしといふのは、其國家は偉大なる教を持つて居るもので、例へば今の世界が競爭して爭ふ所の武力の競爭、或は經濟の競爭、さういふやうな他國の利益を侵害する目的に於ての國家的の競爭といふものを全部否定する所の主義である、何を以て然らば國の仕事とするか？其國の持つて居る所の精神的文明、道德的、宗教的偉大なる所の文明を以て、さうして互に國といふものは競爭しなければならぬ。他の言葉を以て言へば道德的競爭と云ふか、偉大なる崇高なる價値ある文明の競爭を互にやるが宜い、今迄のやうに金の引つたくりの競爭、殴り合の競爭をやると云ふことは國家の第一の職分ではない。國家を組織する所以は、日は東より出でて西を照すと日蓮聖人が言つた如く、日本の偉大なる文明を以て世界に光を與へなければならない。それには精神的の文明を完成するには立派な教と

云ふものを構成してかゝらなければならないと云ふのである。

國の大切なのは單に領土を守る爲ではなく、人民の生命を保全する爲でもない、無論其等はやるけれども、それは附けたりである。第一は其國家が捧持して居る所の偉大なる敎があり、道があり、往いては世界萬民をして此偉大なる敎の德澤に浴せしむる上に於て、國は法を護持して居るものである。敎を擁護して居るものである。故に敎を棄てたる國家は滅亡して宜しい、是は實に明確なる議論であると思ふ。一人の人間に比例して見ても體ばかり達者でも了簡が惡い、する仕事も惡い、達者になれば泥棒を働くと云ふやうな人間であるならば、其人間は達者にならず寢床にウン〳〵唸つて居る方が宜い、回復すると出刀庖丁を提げて人の所へ押込んで强盜を働く、國家が隆盛になれば直ぐ武器を以て他を侵掠する。左樣なことならば其國家は衰弱した方が人類の幸になる。斯ういふやうな意味で遠慮會釋なく國家を批判して、國家を理想的に導かうと努力した點に於て、日蓮聖人は私は最も先覺者であると思ふのであります。

（次續）

日蓮敎學講座（第十一回）

文學士　河合陟明

★　即時に諸天、虛空の中に於て高聲に唱へて言く『此の無量無邊百千萬億阿僧

★　祇の世界を過ぎて國有り、娑婆と名づく。是の中に佛有す、釋迦牟尼と名づ

★　けたてまつる。今諸〳〵の菩薩摩訶薩の爲に、大乘經の妙法蓮華　敎菩薩法

★　佛所護念と名づくるを說きたまふ、汝等當に深心に隨喜すべし、亦當に釋迦

★　牟尼佛を禮拜し供養すべし。』彼の諸〳〵の衆生、虛空の中の聲を聞き已つて、

★　合掌して娑婆世界に向ひて是の如き言を作さく、南無釋迦牟尼佛南無釋迦牟

★　尼佛と。時に十方世界、通達無碍にして一佛土の如し。（妙法蓮華經如來神力品）★

ユダヤ民族の理想と日蓮主義

予　近日特に感ずる所あり、本講座の別論として、是の如き一論を寄す。炎暑赫々の節、敢て山間の涼風一陣を送らんと欲す「佛陀の人格的價値」に就ては、來月より再び繼續する所あらん。乞ふ、讀者宜しく之を諒せられよ

巨眼を放つて世界史の古今を大觀するとき、東西處を易へ時を易へて興味深き一對の事實を發見する西洋史上の遙かなる古代、紀元前八世紀の半ば頃であつたらう。ユダヤ民族がその神エホバの守護に狎れて、漸く腐敗墮落するに至り、次第に神の選民たるの資格を失ひ來つたとき、ひとり野に立つて叫ぶ者が現れた。彼等が北の王國イスラエルの有名なる聖地ベテルに祭禮の爲に集ひ來つて、宴まさに酣に歌ひ舞じつゝあるを驚かしたのである。これこそ誰あらう。豫言者アモスである、彼は八世紀より六世紀に及ぶユダヤ宗教史上に於て一種悲劇的光彩の裡に終始したる一群の豫言者の先頭に立つたのであつた。彼は何を叫んだか。彼はエホバの守護に狎れたイスラエルが、アッシリヤ人の爲に亡ぼさるべきを警告した。しかも驚くべきは、彼に從へば、イスラエルのこの最後は決してアッシリヤそのものの勝利を意味しなかつたことである。エホバがイスラエルを亡ぼすのである。イスラエルの神エホバこそ、敵アッシリヤを使役して己が守護すべき筈のイスラエルを踏みにじるのである。しかもこの事は何の爲にであるか、イスラエルの不正不義を懲さむ爲にである、エホバは祭禮や供物を欲しない、神は正義を欲したまふ。と。

果せる哉イスラエルはアモスの豫言警告したるに違はず、七二一年遂に勇武殘忍なる北方の蠻族アッシリヤ人の手に仆れた。曾て誇りしダヴイッド●ソロモンの榮華もはた何する所ぞ。アッシリアは實にその當時新たに崛起して盛に四隣を侵略し、東はメソポタミヤ平原より西はアラビヤ、アフリカの北部に至る、バビロニヤ、フエニキヤ、ヘブライ、エヂプト等、いはゆるセム人種文明の古代東方諸國を盡くその版圖に併呑し、實に西洋史上大帝國建設の初であつたのである。

ヘブライ民族の南の王國ユダヤは、イスラエルより生き延びること百餘年の後、五八六年アッシリヤ大帝國に取つて代れるバビロニヤによつてまた同一の運命を見た。（神武天皇崩御の頃）彼等は亡國の民としてバビロンに移住を强ひられつぶさに流寓の憂目を味はざるを得なかつた。このいはゆるバビロンや虜囚の前に現れた豫言者イザヤとエレミヤとの說きし所も、また大體に於てアモスと一致した。世界的大國アッシリヤもバビロニヤも、エホバの手には一個のかよわき杖に過ぎず、彼等の勝利はエホバによつてイスラエルの頭上に加へらるゝ懲戒の苦であることを信じつゝ、これらの豫言者たちは大膽に勇敢にあらゆる無理解、嘲罵、排斥をも物ともせず祖國の敗北または滅亡を豫言警告したのである。

さてこの新運動は何を意味するであらうか。豫言者たち自身は父祖の神をさながらに說くと信じつゝも、同時に或意味に於ては全く新しき神と變じた。殊に一民族を守護すべき筈の神が、敵の位置に立つて我が民族の滅亡を計るといふ、當時にあつて實に意外また法外の思想は、國家の意義また從つて人類生活の意義及び更に歷史なるものゝ價値を極めて重大ならしめたのである。歷史はもはや特定の民族または國家に限界乃至標準を有する比較的に私的なる事件ではあり得ない、諸の民族諸の國家は共通の力に支配され共通の運命に出會ふが故に、歷史は今や包括的普遍的意義を有するものとなるに至つた。しかもかくの如きいはゆる世界史なるものゝ觀念が、こゝ死海のほとりの荒野に牧羊に從事した渺たる一農夫（アモス）の宗教的體驗に於て始めて萠したことは、思想史上特筆すべき出來事である。

而てこれらの豫言者たちに從へば、エホバは正義を欲する神であるといふのがその根本思想であり、しかもこれこそ彼等に於て最も獨創的なるまた最も本質的なる思想であつたのである。エホバは正義の大國を驅使して、

神であればこそ、我が愛兒たるイスラエルとの深き自然的因緣にも打勝ち、而てあらゆる民族をも吾が掌中に握り、いかなる大國をも思ふがまゝに驅使する力と權利とを保有するのである。尤もイスラエルは猶は神の愛兒、選ばれたる民であることを彼等は信じつゝも、しかも諸の民族が共通の目的に向ふ共同の歷史なりといふ觀念、またその歷史の終極の意義の意識も遙かに明確となり、かくして國家または民族の運命乃至は歷史の意義の考察よりして、ユダヤ敎の著しき特徵をなしたその倫理的一神敎は生れたのである。神の道德的意志の實現を說いたことによつて、豫言者たちは少くとも西洋史上始めて人類歷史の權利と意義とを肯定し、また確乎たる基礎の上に置くを得たのである。

さて再び繙つて東亞の天地に眼を馳する時、まさに六百五十餘星霜の昔、かの前古未曾有の世界的大帝國大元蒙古を背景としたる、祖國日本の歷史否世界の歷史に於て、日蓮聖人の出現及び活動を古代イスラエルの宗敎史實と對比し來つて、吾人は一種深き感慨に打たるゝのである。もとより東西兩洋の文化思想が、その民族的地盤と歷史的背景とよりして種々異る所あるはいふ迄もない。殊にイスラエルの宗敎思想と佛敎のそれとが、或はキリスト敎の神觀と我の佛陀觀とが、その哲學的思想の根抵に於て碩異あるは夙に明かなる所である。しかしながら今日學界に於て盛に論議されつゝある所の、佛陀出現以前に於けるウパニシャッドの哲學乃至は婆羅門の宗敎思想と佛陀の敎說との根本的相異、或はまた佛敎とキリスト敎との著しき對立にも拘らず、兩者の神と佛陀との觀念の間には、就中日蓮聖人の感受しまた映寫されたる本佛の信仰意識と、イスラエルの豫言者又はキリスト及びパウロの神信仰との間には或點に於て根本的に一脈相通ずるものがある。夙に東洋の天地に於ては、かくの如き一大道德的宗敎思想が培はれてゐたのである。宗敎思想の基礎的哲理に於ては殆ど全く異るにも拘らず、宗敎思想の上部建築——即ちいはゆる信仰意識に至つては、又實に洞通一貫せるものがある——しかしながらこれは全能なる絕對的超越的實在に對する宗敎思想として或は當然のことであるかもしれない。——東西兩洋の宗敎思想は——時の古今を超え處の隔りを越え——その信仰意識の尖端に於て、殆ど相接むとするに至つた。——神の正義、神の道德的意志の實現に對する——本佛とその正法、本佛の大意志力、いはゆる『如來秘密神通之力』殊に正法擁護に際するその現れ。神の全能と、法界（宇宙）の法王としての本佛、神の義に對する神の愛、神の恩寵と、正法によつて敎化し濟度する本佛の大慈悲と功德、歷史に於ける神の啓示と、本佛の應現、更に又その宗敎史實の如何に相似たることであらうか。イスラエルの豫言者と彼等の故國、かの豫言者たちとアッシリヤ及びバビロン——日蓮聖人と祖國日本、豫言者日蓮と蒙古來……。

しかしながら兩者が世界及び歷史に對する攝理の觀念に於ては、その宗敎哲理としても、また現實の事實としても、固より大いに異るものがあるではないか——

『イスラエルをアッシリヤやバビロンの懲戒の苦に委ねたのが神の正義であつた如く、今や我等を復活して流竄の憂き目より救濟するのも亦同じ正義の働きでなければならぬ。イスラエルは「エホバの僕」として眞理をあらゆる民族に傳へ、世界を靈的に支配せねばならぬ。而てエホバはこの重任を成遂げしめるであらう。眞理の勝利は同時に神の勝利、しかもこゝにこそ世界史の目的及び意義は存する』と見たる、彼れイスラエル民族の理想は遂に成らず、神の榮光と正義とを、往いて萬國の民に宣べ傳ふべき「エホバの僕」神の選民——神の愛兒——は、そ

の後永く々々敗殘の民、亡國の民として屈辱の憂き目を見るに至つた。『イスラエルのみ獨り眞の神を知るものであるが故に。』といふ、その光榮なる特權と任務とは果していかになつたのであらうか。彼等は二十世紀の今猶ほ流離困頓の間に苦しんでゐるのである。或はこれをも尙ほ神の試練といふべきものなのであらうか……。

イスラエルの豫言者の精神を傳へまた完成するものとして、即ち最後の豫言者として同時に『メシア』（救濟主）としてキリストが出づるに至るや、ユダヤ人固有の民族中心主義は全く跡を絕ち、純然たる世界主義が行はれるに至つた。而てまた豫言者或はユダヤ敎に於て單なる希望の對象であつた世界歷史の目的が、キリストの出現と共に少くとも原則に於ては實現を見たと信せられたことは、意義ある歷史といふ思想を一層明確にまた堅固にしたのである……と、彼のキリスト敎徒は敎へてゐる。

しかしながらキリスト敎はその後、中世に至つて甚しく俗權と結托し、否俗權を支配し、いはゆる神の意志を地上に傳ふべきローマ法皇の敎會は、曾ては彼の神聖ローマ帝國と相對峙して、靈界と俗界と、吾々分析的に支配權を揮つてゐたものが、遂には俗界そのものにまで下り來り、然り啻に宗敎上の最高權に滿足せず、更に帝王の上に立ちて世界に號令せんとするに至り、――あゝ人慾、人間の權勢慾の如何に甚しきかな――法皇グレゴリー七世の如きは、ドイツ王にして神聖ローマ皇帝なるヘンリイ四世を、又、法皇インノセント三世の如きは、大陸の帝王はいふまでもなくイングランド王ジョンをも屈服し、彼等國王は、はる〳〵行いて法皇に謝罪し、殊に、數日數夜雪中に跪きて哀訴嘆願し、僅かに破門を解るゝを得たる程なる、帝權の哀微と反比例して法皇權の極盛を致し、宛然として歐洲の統裁者たるの觀あり、各國の政治に干涉するのみならず、君主の言行をも一々に之を糺し、かくて法皇の敎會は此等に對する獨裁的なる一種の變態的國家――宗敎的政治國家として歐洲諸國に君臨するに至り、自ら俗物となり果てゝ一切の世事に干涉するや、人を驅つて暗愚と迷信とに陷らしめるやうになつた。

しかも權勢の極は必ず腐敗す、これ東西古今の史上常なる所――ローマ法皇の如き、又何ぞこの例に洩れんや多年の積弊凝つて遂に宗敎改革となり、これと同時に久しく抑壓せられてゐたギリシヤ思想いはゆる『異敎思想』は、嚴寒に虐げられてゐた春の若芽の如く、文藝復興を序幕として華々しく近世史上に擡頭し、こゝに絕えて久しく開かざりし人類知識の寶庫は、熾烈なる欲求を煽つて、遂にいはゆる『神の侍女』より獨立したる哲學的眞理の探求、急速なる科學の發展を促して、いはゆる近代文化を形造るに至り、他面かの聖地回復を動機として、當時歐洲に絕世の威權を揮ひし法皇ウルバン二世が、諸侯をクレルモンに會して叫びしより俄然として起りし十字軍は、これ宗敎戰爭、否一種の人種鬪爭として、前後七回二百餘年に亘りしも遂に成功を見ずして終息するや、おのづからこれに伴つて宗敎熱の冷却、法皇權の衰頽、封建制度の沒落、交通、通商の發達、地理上の發見、眼界の世界的擴大等々と相俟つて、多年ローマ法皇の寒冷なる氷雪下に埋もれてゐたる王權の勃興、國家思想の隆起を促し、しだいに近代國家の成立を見るに至つては、こゝにキリスト敎は一面に於て眞理と、他面に於て國家と、腹脊共に挾擊せらるゝに至つたのである。

而ていはゆる近代國家は、かの十八世紀末のフランス革命を前後としてしだいに君主國家より共和制に移るに至り、特に近くは歐洲大戰を舞臺としてロシヤ、ドイツ、オーストリヤ等の血腥き革命を演ずるや、地球上ひとり大日本帝國を除く殆ど多くの國家は、共和國乃至はその實質に於て共和主義的國家

となるに至つたが、しかもこれと同時に今や世界的或は國際協調と叫びし曾ての夢は空しく破れて、諸君、現實を直視せよ！『萬國の勞働者團結せよ』といふ如き階級同盟、階級鬪爭ではなくして、否むしろ國家意識、民族意識、人種意識はいよ／＼燃烈となり、陰鬱なる、鬪爭的暗雲は不氣味に人類の頭上を覆うてゐるのである。メッテルニヒの神聖同盟も、ウイルソンの國際聯盟も、たとひ暫有的効果はあつたかもしれぬが、やがては一片の反古紙として葬り去られたのであり、又葬り去らるゝであらう。かの歐洲大戰は、歐洲文明の卒業試驗であつた。而て彼は無殘に失敗した、落第した。人類の智囊と財力とを傾け盡した所の道具と方法とを以て、大規模なる人類の殺戮を、豫想通りに、或は豫想以上に之を遂行した。曾て聖者の豫言し叫びし『末法』の時代相は、今更ながら吾人に深刻であり痛切である。而てかの歐洲大戰以來、キリスト敎は一層鼎の輕重を問はるゝに至り、しかも今日思想、經濟、軍備、乃至あらゆる世界的不安は皆かの大戰より由來してゐるのである。果然『西歐の沒落』てふ叫びが、彼の地の學者シュペングラーによりて唱へ出さるゝに至つた

人類の歷史は確かに一面に於ては鬪爭の歷史である——階級的にも、國家的にも、民族的にも、人種的にも、はたまた宗敎的にも……吾人は「人類が何故に戰はざるを得ざるか」に就ては、今更ながら深き問題とせざるを得ない。世界平和の理想は果して何れの日に實現せらるゝのであらうか、或は人類の單に今日までの歷史によつて、神の攝理を——神の意志を——忖度することはできぬと言はるゝでもあらう。然しながら歷史の裡に神の啓示を見るといふのはそも／＼如何なることであらうか。それは『世界の歷史は世界の審判史である』といふヘーゲル的の意味であらうか。或は現實を超えたる默示錄的深みが、歷史の背後より或はその前面より、だゝその

閃光を放すといふのであらうか。しかし神の道德的意志の實現はまさしく歷史に於て啓示さるゝといふではないか。或は世界の人類殊に西洋人種が皆誤てるが故に、今日の結果を見てゐるのであらうか。彼等の間に眞のキリスト敎は求むることができないのであらうか。然らばこれを何處に求むべきや。『神の國は、こゝ　そこ　かしこに在りといふべきものにあらず、見よ神の國は汝等の胸の內に在り』とは何ぞ、信仰——救濟——贖罪とは何ぞ、復活とは何ぞ、末日審判とは何ぞ、新たなる天地の創造とは何ぞ、神の超越的實在とは何ぞ、神の人格——神とは何ぞ。

さりながら——三度び吾人は翻つて、靜かに大聖釋尊の明敎を尋ね、その大乘深邃の義門を叩く時、人類の本質または理想的價値とその現實の姿、本覺（覺るべき根本）の靈性と無明の迷妄、人間の法界（宇宙）に於ける地位または果報、生命の不滅と善惡の業の三世に亘る因果的連續、人間の向上又は墮落、迷へる衆生に對して、涅槃の境界に於ける根本的大覺者——本佛の實在、その慈悲——信仰——救濟——修行——得道——佛性即ち本覺の顯發——覺者の生命に於ける常樂我淨自己即宇宙、宇宙即自己の境地を覺認體現したる絕對的一大人格の實在と淨土、解脫涅槃の境界……常恒の恩化……

この無上の福音を把握して再び現實の世界に還り來たる時心靈界の『轉輪聖王』を以て自ら任じたまひし大聖釋尊が、一代五十年の說法諄々たる慈敎垂誡の後『護法護國』と要約してこれを國王に付囑し以て正法を國家に結ばしめ、道力を勢力に合せしめ靈界の理想を現實の事功に移さしめたまひて、夙に『法國冥合』の深旨を明したまひ、而てその遺法流傳すること二千餘年、夙にその出現を豫言せられ、また自らも遠く將來を豫言したる末法の『法華經の

行者』日蓮聖人に至つて、かの大法は、この聖者が自ら育されたりし「神武建國」の土に培はれて最も鮮かにまた力强く樹立せられ、こゝに『立正安國』の大發揮となり、『本門戒壇』の深き念願となり、而て『一天四海皆歸妙法』の大理想大誓願となるに至つたのである。あゝこの『廣宣流布』の大願に、して叶はゞ、人類平等——四海一家の春を遂に迎へることができるであらうか……

宗教信仰の靈的權威が、いかに現實國家の勢力と交渉しまた結合し、或はこれを指導すべきであらうか。國家はいかに宗教を迎へるべきであらうか。人類は常に靈肉兩面を有つ、而て又しば〳〵その岐路に立つ。純肉の世界か。純靈の世界か『神のものは神に還し、カイゼルのものはカイゼルに歸す』べきか、肉の皇帝か、靈のガリラヤ人（キリスト）か。否かのイブセンの說きし『第三帝國』はいづこにありや……。

ローマ皇帝ジュリアンは、いはゆる異教徒としてかの先にコンスタンチン大帝によつて國教と認められしキリスト教に對して戰を宣し、ローマの有してゐる眞の力を活動せしめんとして、一切のキリスト教的のものを破壞した。然し彼はその戰に於て一敗地に塗れて遂に滅びたのであるが、その滅びるに際しジュリアンは己が師たる碩德の學者マキシムスに聞いた。

我れが滅亡するか、ガリラヤ人たるヤソ（耶蘇）が滅びるか、我が皇帝の力が滅びるか、靈の帝國たるキリストの力が滅亡するか、どちらが滅びるであらうか。

マキシムスは答へて、

どうもカイゼル（皇帝）の方が先に滅びさうである。

ジュリアンは、

おゝカイゼルの力はガリラヤ人の力に敗けるのか然し此世の最後まで彼のガリラヤ人のヤソの力が勝ち通すのであるか?!

と再び聞いた。マキシムス再び答へて、

皇帝は今ガリラヤ人に征服される。然しガリラヤ人たるヤソも亦征服される。ヤソの教も遂に世界全體を征服することはできない。ヤソも遂にはやはり征服されるものである。

ジュリアンは三度び尋ねた。

それでは其の最後に勝つ者は何であるか。マキシムスおもむろに答へて曰く、

それは曾て言つておいた、第一の帝國、第二の帝國、第三の帝國と、三つの帝國がある。第一の帝國は肉の上に於ける帝國である。人間の肉體を支配する帝國である。第二の帝國は人間の肉體に構はず、直ちに精神を支配する帝國である。然し肉體と精神とを別々にし、或は肉體だけ、或は精神だけを支配するやうなものは、遂に根本の眞の支配力となることはできぬ。

眞に世界を支配するものは、肉體をも支配すると共に靈をも支配する、肉の世界を一つにすると共に靈の世界をも一つにする、それが最後の帝國であつて、即ち『第三の帝國』である。

肉に於けるところの神、靈に於けるところの皇帝『帝としての神——神としての帝』かくの如きものが地上に現れて、それが遂に世界のあらゆる人類を統一することができるのであつて、それが最後の勝利者である。

大聖佛陀に依つて示教せられ、聖日蓮に依つて發揮せられたる『法國冥合』の大理想は、いはゆる二十世紀の文明を誇る今日に於て、漸く西歐の一角よりも唱へ出さるゝに至つた、それは『第三帝國』の名

に於て……

我等は我が祖國の過去の運命を省て、殊にかのユダヤの民と對比し來つては、そゝろに深き感慨なきを得ない。彼等の國は亡んだ、さあれ我が國は――一種測り知るべからざる所のものによつて常に遂に敵を伏した。それは何であるか、それは『御稜威』と呼ばれ、また『天祐』といふ名にて呼ばれる所のものである。而てその遠き深き由來は、日蓮聖人の而てまた我等の、熱烈なる信仰の標的たる本佛神秘の大能に連る……我等の國民的信念、否、國體的信念、然り皇室の御稜威に對する信仰は靈界久遠の大神秘力に連る……。

ユダヤ民族は自ら神の選民なりと信じた。而て特に惠まれて知る神の福音を、往いて萬國の民に宣べ傳へ、萬民の光として世界を教化し、精神的に支配せねばならぬと信じた。さりながら其の理想は遂に成らずして終つた。否或は將來測り知るべからずと言ふか……。

我等は、祖國日本の『神國』なるを信じ、我等は『天孫降臨』の民族なるを信じ、又その世界的天職使命を信じ、而て實に『天壤無窮』の神勅は、一の宗教的斷定豫言たることを、然り人類の地上に亘りて永遠の權威たることを確信する！

況んや『皇國日本』に、悉く朝宗し同化し結晶されたる偉大なる『東洋文明』が、巍然として世界人文思想界の王者たるに於てをや。

偉大なる東洋の宗教、偉大なる東洋の哲學、偉大なる東洋の道德、偉大なる東洋の藝術、見よ、人類文明の最高峯にしてまた最深底なる――偉大なる東洋の文明、それは日本を養ひ、また日本に養はれた

今や西洋文明もまた入り來りつゝある、彼も日本を養ひまた日本に養はるゝであらう。

東西兩洋の文明統一は、皇道大日本の將來的使命

であらねばならぬ。

而てその統一的文明の大光明を以て、往いて萬國の民をあまねく教化し、世界を精神的に支配せよ。それが皇道日本の、地上に於ける――久遠の約束であらう。

祖國の聖者は、これを宗教的に開顯して、『本門戒壇』と銘打つた――法國冥合の理想の具體的實現である。

見よ、かのユダヤ國家は亡んだ、而てその民族は在り。

更に又、ユダヤ教より脱化したるキリスト教は在り、果してその將來は如何、

むしろユダヤ人よ、日本に歸化せずや、卿等キリスト教徒よ、むしろ佛教信仰に入らずや。

かの慘澹たるイスラエル宗教文化の史上を飾りし悲壯なる豫言者は、今如何なる風貌にてそゝり立つてゐるのであらうか……。

我等は遙かに遠くヘブライの天を睨睥し、ひるがへつて祖國史上の一大巨人をまのあたり直視し、さてまた我が祖國の運命乃至使命を想望して、そゝろ漂渺無限の感に迫られつゝ――おもむろに『黎明』の曉鐘を打たんとするものである……

見よ！

佛眼を藉つて時機を考へ、佛日を用つて國土を照せ

法華經の第七に云く、我が滅度の後、後の五百歳の中に廣宣流布して、閻浮提(全世界)に於て斷絶せしむること無けん。

其時に智人一人出現せん……前代未聞の大鬪諍一閻浮提(全世界)に起るべし。其時日月所照の四天下の一切衆生、或は國を惜み、或は身を惜むゆへに、一切の佛菩薩に祈をかくとも驗なくば、彼の僧みつる一の小僧を信じて無量の大僧等八萬の大王等一切の萬民皆頭を地につけ掌を合せて南無妙法蓮華經と唱

ふべし。例せば神力品の十神力の時、十方世界の一切衆生一人もなく娑婆世界に向つて大音聲を放ちて南無釋迦牟尼佛南無釋迦牟尼佛南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經と一同に叫びしが如し。

（日蓮聖人撰時鈔）

聞け、偉大なる聖者は――人類の將來を豫言する――然り、人類の將來を約束する。

南無妙法蓮華經

東郷元帥

大八木義雄

法華經の金文を扇書き給ひたりければ

いまは神にしつまりたまふ君の筆の
跡のけたかき法の華かな

御詩に宣はく至誠神に通す

いせの神しろめすらむやそちあまり
八とせ貫く君か誠を

國葬の日に

英吉利の帝も花環捧げましぬ
このたくひなき人のみたまに

日本精神運動と聖日蓮（上）

和賀義見

一、國家の危期と末法思想

保元、平治の戰さては壽永四年平家滅亡の間に見るに忍びない陰慘な暗影が横たはつてゐた。天壤と共に窮り無かるべき天津日嗣の帝安德天皇が、しかも神器を奉じて海底の藻屑と共に哀れ悲しき運命を辿らせ給ひしことは、彼の義朝が父爲義を六條河原に斬りし事どもと共に、時の人々をして世は將に亡びんとするには非ざるか、我國も將に『末ざま』になりつるかと思はしめた。

時に源頼朝が征夷大將軍の節刀を受け、鎌倉に幕府を開いて時の支配階級たる武士を統べ治むるに及んで、扨は八幡大菩薩百王守護の誓も今は漸く百代にも近づかんとすれば、世を統ぶるの大權も或は九重の宮を離れて源氏の統領征夷大將軍の上に委ねらるゝ時代になつたのではなからうかと、識者と言はるゝ人の間にさへ斯る考を持つものが次第に多く出づるに至つたのである。

然るに源氏は三代にして亡ぶるに至り國を治むるの實權は當然京都に還るべきものと期待して居たのであるにも拘らず、北條義時、政子と謀つて幼少なる將軍を立て實權は北條氏自らの手に收めた。

此に於て後鳥羽上皇英邁の志を以て、朝廷の衰微を嘆き、天下の大權を京都に收め世を古に復し

給はんとの御叡慮から、腹心の公卿、武將、僧徒を語らひ、遂に承久三年北條氏追討の院宣は降された。

然し乍ら大義名分に暗く、義家以來の恩顧に深く感じて居た武士は、盲目的に政子の言を至上とし、一には積大の恩に報ひ、二には厚き恩賞にも與らんとして十九萬の關東の大軍は雪崩の如く京都に向つて攻め上つたのである。

宇治勢多の戰に三日を支え得ずして、宮方一萬に足らざる兵は散々な敗北の餘儀なきに至つた。大義名分は如何にも知つてゐるかの如くに見せかけ仁政を行ふと稱して衆心を集むることに巧であつた北條氏は、その本心を遺憾なく暴露して逆賊不臣の事を敢てするに到つたのである。即ち後鳥羽上皇を穩岐ノ島に、順德上皇を佐渡に、土御門上皇を土佐に配流し奉つた。雅成、賴仁の兩親王竝びに謀に與つた公卿、武將を或は遠島に處し、或は首を刎ね或はその封録を奪つて之を放つと云ふ樣な暴逆無道の限りを盡したのである。此に至つて天下全く暗雲低迷し、國躰の本義を知るものさへなく、剩へ一世を覆ふて世は將に亡びんとするかと生きたる心地も無かつたのである。

加ふるに地震、水害、飢饉等々天變、地夭頻りに到り、不安は更に深く、惱は更に〳〵重く課せられた。全日本國土に亘りこの下剋上の國狀と、國民精神の行詰りとは我國史上に未だ嘗つてその比を見ざる所である。今は全く佛者の言ふ末法五濁の世、白法は穩沒して正しき佛陀の教は影を潛め、名は佛教と稱すると雖も全く救世の能力を失つて了つたのである。世を救ふべき教は影を沒し國狀は全く行詰つて、國體の本義將に滅びんとしてゐる。誰人が能く斯る非常の秋に當つて國民精神の指導と、國體の正義を闡明して救世の淨願にや立ちし。

二、末法打開運動の不成功

椰尾の妙、惠上人は德一世に高く、その名四方に聞えた大知識であつた。北條泰時を諫めて、『叡慮に叛き下剋上の大逆を敢て爲したことはその罪斷じて遁るべきではない。故に篤く德政を行ふて庶民を愍み、仁政を行ふべきである』と奬めた。北條氏は此の言を聞いて、泰時、時賴みな民意を安んずることに心を用ひたのである。

然し乍らそは立正大師が安國論の劈頭に於て『萬民百姓を哀れんで國主國宰の德政を行ふ、然りと雖も單だ肝膽を摧くのみにして彌々飢疫に逼る、乞客目に溢れ死人眼を滿てり（乃至）二離璧を合せ五綵珠を連ぬ。三寶世に在し百王未だ窮らざるに此の世早く衰へ其の法何ぞ廢れたる』との憂憤の聲に聞くが如く、我國の本義も、國民精神の確立も、世を救ふべき明教も、未だ少しも顯はされては居らない佛教に言ふ末法は五濁の惡世である。即ち人間の識見が墮落して遺憾なく人間惡を發揮し、社會は次第に亂れて時代精神も又墮落する、惱に滿たされた人々の遂に生きる事の價値を失ひ使命を失つた愍むべき敗殘の生活、是等が宿命的に課せられたる運命であらうか。時代の必然的に斯く約束づけられ、而して現實の事實が目のあたりにその證明を爲して、全く世の終の近づけるかを思はしめた。又末法は白法穩沒の時代とも言はれて居る。白法とは正しき佛の教である、正しき教が影を沒するといふことになつたならば、人心は如何にして救はるべきであらうか現實の世は慘ましき悲しき無殘の姿に覆はれ、人心は極度に荒み頽廢し、世を厭ふの風潮は一世を覆ふて見逃すことの出來ない重大性を齎したのである。今や濶達進取の氣象に富める日本人は國家に對する熱情も、人生に對する希望も將に失はんとしたのである。

斯る時に當つて此の行詰りを打開せんとして二つの精神運動が起つて居た。その一は法然上人や、親

鑒上人の提唱せる念佛門の教であり、第二は榮西、道元二禪師の唱道にかゝる禪の法門が即ちそれであつた。即ち前者は此の現實の世は穢れたる所であるそして人間は又煩惱罪惡に滿たされてゐる、人も國も人生も自然も共に厭ふべき失望狀態に置かれてゐるのであるから、此の國の事はあきらめて西方十萬億土に在す彌陀の本願に依つて極樂往生をしやうと說くのである。此の罪業深重の末法にあつて大義名分であるとか、國家の問題であるとか、さては人生の意義であるとか言ふ樣なことは考へることも恐ろしい、念佛修業の障碍であると言つて之等を悉く排斥し、無條件に西方十萬億土といふ方向に向つて逃避せしむることに依り、此に一般民衆の惱を輕減せしめやうとしたのである。その教理に對する探究は暫く之を措いて、兎にも角にも此の思想が民衆の共鳴を得て非常な勢を以て擴大せられて行つたと言ふ事は、人生苦から逃れやうとする立場の共通な事に依つても、又當然あり得たことであつたと言はなければならない。

世の苦と共に苦しみ、人の嘆を共に悲しむ人は慥に凡俗の水平線を超えて、大衆に呼びかけ得る資格のある人である。然し乍らその同情が最後の解決案を有せざるものであるならば、それは究竟のものではない。如何に唯一筋に安價な同情のみを注ぎかけて人間本然の要求を放擲せしめんとしてもそれは不可能事であるばかりでなく、却つてその歸結を誤る。即ち念佛の教が末法を正しく解決し、今日本に課せられた國體正義を解決することの出來得なかつたといふことは、國家の爲にも念佛門の爲にも悲しむべき事であつたと言はれなければならぬ。

然らば第二の禪門の教風はどうであつたらうか。支配階級たる武士は戰場に於て目に餘る敵を物ともせず、無二無三に斬つて入り當るを幸ひ薙ぎ倒し死を見ること歸するが如く、何等の執着を持たず、主の爲に命を捧げる事を以て武士の覺悟として居たのである。殊に戰には機略縱橫、時に當り機に臨み自在に之を處斷して意氣既に敵を壓し、戰はざる以前に敵に勝つことが必要である。斯る武士階級には氣の弱い厭世的な教では役に立たない。戰場に於て無人の曠野に立つが如く、本來無一物、生もなく死も無し、劍戟閃めく間に大覺を現在前せんと言つた樣な教風こそ自ら迎へ得らるゝ處であつたのである。殊に承久の役に於て京都の尊嚴を知らず只一筋に源氏譜代の恩顧に報ひんとして鎌倉に馳せ參じたのであつたが、宮方を一掃した後の北條氏の態度は解し難きもの尠からず、疑は懼て惱となり、惱は自責の鞭を以て其の良心を呵責する。何事ぞ錦の御旗を高く指し、鳳輦を先に立てて官軍攻め來る時は弓弦を外し。兜を脫ぎ畏りを申すべしと、君臣の分を知りたりげに記錄を遺さしめた北條氏が、畏れ多くも　天皇の廢立を敢へて爲さんとし、三上皇を遠島に處し奉るとは。天照太神、弓矢八幡爭か許し給ふべきか源氏の御爲め君側を淨めやうとしたことが却つて一天萬乘の大君に叛き奉る結果となつたことを考へて、武士達は如何にもしてその責任から逃れやうと焦るのであつた。

そこで禪家の說く空の思想はこれら武士の要求には最も都合の良かつた教であつた。一切は因緣の生む所、本來無一物、何れに空なるべきものゝ責任を追究する必要があるか、一切空であるとならば人生の事は皆空である。惱も、苦も、大義名分も、一切皆空である、唯因緣に從ふのみと說くのであるから禪の教風は武士階級とは切つても切れない關係に置かれてその一門は漸く四方に迎へられたのである。然し此の空なる語に依つて責任を回避する態度は決して釋迦如來の說かれた空の眞意ではなかつたのである。

大法鼓經に、有我無我の說に於て『有我の聲に恐

れ大空斷見に入つて無我を修習するものは、地獄谷に墮ちて狠に骨迄喰はるゝが如きものである』と誡められ、涅槃の夕に顚倒を正された中に『我を無我想す』と言つて毀ることのない常住なるべきものを無我想する、即ち本質迄見失ふが如き大なる誤りを指摘して強く教誡せられてゐる。

以上の事に依つて略々空、無我といふ語の中に含む意義が無内容を意味せるものでなく、又責任を逃れて現實の問題を輕視したものでもないことが明確にせられる。却つてその反對に不確實な認識を否定し、無限に眞理の本質を獲得せんとして各方面より肆證法的に發展の論理を辿り、乃至直觀に依つて之を得やうとした處に空の思想の意義があるのである眞實なるもの、偉大なるもの、常住なるべきもの。尊嚴なるべきもの、之等を無視して空の義は存立し得べきものではないのである。

然るに當時の禪家の齎らせる弊害は、日本國體の本義將に地に墮ちんとする承久の大禍亂の眞只中に當面の責任を擔ふべき立場にありながら、日本の危期當面の事實を未解決のまゝに置て、大悟徹底を得たるかに儀ふてゐたのは、洵に殘念なことであつたと言はなければならない。

されば念佛は正法爲本と言ひ、禪は興禪護國と言つて、鎭護國家の敎があるかの如く言つてゐるけれども、國體の本義を根本的に解決する所迄は至つて居なかつたのである。

斯く國家は行詰り指導精神たる佛敎も旣に斯の如くであり、神道者流に到つては何等國家の爲め民衆の爲に盡せる片影だに認むることの出來なかつた此の時、慨然として眞の大和魂を以て眞の佛敎を光顯し、一代六十一年の血に滲むが如き全生涯を以て此の行詰りの末法思想を打開し、國體の本義を闡明せられたる大聖者は、實に全日本民族の爲め全佛敎徒の爲め無上の氣を吐いた聖日蓮その人である。（文責）

法華經講話（第八講）

妙法蓮華經序品第一（承前）

文學士　小林一郎

これまで序品の中の、釋尊の御身から出た光が東の方の世界を照していろ〳〵な佛道を修行して居る者のありさまが見えた、それに就て彌勒といふ菩薩が疑を發して、その意味を普賢といふ菩薩に訊ねたといふところを讀んで居りましたが、その彌勒とか普賢とかいふやうな人々に就ては、ナニも別段に說明をしませんでした。今日は、その彌勒、普賢といふやうな人の事柄を少し申して置きたいと思ひます

一體佛樣が敎をお說きになるといふことは、一切の衆生を濟ふためであるのは勿論でありますけれども、しかし佛樣が如何に完全な智慧を具へて居られても、敎を求める者の數は限りがないのでありますから、佛お一人の力ですべての人に敎を與へるといふことは、出來ようの譯がない。そこで佛の敎を受けた者の中の殊に智慧もすぐれ、德も具つて居る者が佛をたすけてお手傳ひをするといふことになる。又お手傳ひをする事がその人々自身の修養にもなるわけです。菩薩といふのは、さういふやうな仕事をする者であります。

幾度も申した通り、自分を救ふといふ事と人を救ふといふ事とは、相俟つて出來る事であつて、自分

一人が偉くなつたら宜からうと思つた場合には、つまり言へば自分一人偉くなることも出來ないのです人の爲に……といふ心持があつて初めて自分が完全になるのでありますから、人の爲といふことが自分の爲であり、また自分を完成することが人の爲である。要するに自他といふものは相俟つて行かなければならない。その自から救ひ、人を救ひ、また自から覺り、人を覺らせるといふやうなはたらきをする者、それが菩薩であります。ですから菩薩といふものは、佛樣と吾々凡夫との中間に立つて居て、上の方の佛樣の敎を受けては、下の方の凡夫に傳へる斯ういふはたらきをする譯です。私共はまことに智慧も德も無い者でありますけれども、少しでも佛敎を學んだ以上は、やはりさういふ心持を持ちたいと思ひます。どうか此の佛の敎を自分のものにするのには、自分一人で解つて居るのでなくして、大勢の人にこれを分けたいといふ心持をおこす、さうすると自然に自分も一生懸命になりますから、今まで解らなかつた事も十分に究めるやうになる譯です。これを解り易く圖に描いて見ると、

吾々は凡夫で、煩惱だらけの人間であります、佛樣といふのは絶大の智慧、絶大の慈悲を具へた方であります。その佛の敎を、佛樣が直接にもお說きになりますけれども、その中間に菩薩といふものがあつて、その敎を普く世に弘めるといふはたらきをする譯です。

それで菩薩がさういふ風に凡夫を敎へ導くお手傳ひをすることに依つて、この菩薩がやがて佛に成るのです。初めは佛ではないのですけれども、佛の敎を世に弘めることを始終お手傳ひをして居つて、さうして自分も修行を勵んで居るから、結局菩薩が佛に成れる譯です。それから吾々凡夫も、初めは凡夫であるけれども、だん〳〵さういふ敎を聞いて居る間に菩薩のやうな心持になりまして、自分が少し解つて來れば、自分一人解つただけではどうも勿體ないこんな尊い敎を自分だけで持つて居つては甚だ勿體ないから、どうぞ他の者にも分けてやりたいといふ氣分が起つて、他の者にも敎を與へるやうになれば、舊の凡夫ではなくして、それは菩薩の行をして居るのである、といふことになつて行く。それで菩薩の行をしてゆく間に、これがだん〳〵進んで行けば、結局これが又佛のやうにも成れる譯です。元は凡夫であつたが、だん〳〵菩薩の行を積んで佛のやうに成る、その人間の感化をまた他の凡夫が受けてその凡夫が受けて、その凡夫がまた菩薩の修行をして結局佛に成る。さうすると其の人の敎を受けた者がまた同じやうになつて行く、斯ういふ風にしてだん〳〵に佛の敎といふものが滅びないで世の中に弘まつて行くのであります。

だから一たび佛が出て世の中に敎をお說きになりますと、たとひズツト末の世になりましても、その敎といふものはまるで朽ちたり滅びたりすることはない譯です。今吾々はまことに凡夫で、口ではいろ〳〵な事を言つて居るけれども、實際に於てはまことに羞かしいやうな行ひをして居る者でありますから、しかし兎に角佛の敎に緣がある者でありますから、どうぞこれを十分に修行して、さうして人にも傳へたいといふやうな心持をおこす、所謂菩薩の行を積んで行くのです。現在の私がそんな事を言つても、『ナンだ彼奴が佛に成るナンて……夢を見て居るのぢやないか』とお考へになるかも知れませんけれども、人間の生命といふものは三十年や五十年で終るものではないから、幾度でもその生活を繰返して行く間には、この心が弛まなければ、結局菩薩の道を完成して、最後には佛の境界にも行けるだらうといい

ふ望は持てる譯です。でありますから菩薩の行を積むといふことが、要するにお互に取つては一番大きい問題なのです。現在は凡夫だけれども、菩薩の行を積むことに依つて、佛の境界に近づけるのでありますから、私共に取つては菩薩道を行ずるといふことが、何より大きい問題になつて行くのであります

釋尊の當時に於てもその通りでありまして、釋尊は勿論佛樣でありますから、絕大な智慧と絕大な慈悲を具へて居られるのでありますが、その佛樣の御はたらきを御たすけ申すものは菩薩であります。その菩薩の中に於て殊にすぐれて居る菩薩といふのが文殊、普賢であります。よく繪にあります、三尊といつて、お釋迦樣が中央に居らつしやつて、兩方に文殊と普賢の二人の菩薩が居る、文殊の方は獅子に乘つて居つて、普賢の方は象に乘つて居るといふ繪が、よくあるものであります。あれはナニも二人の菩薩だけが偉いといふことを意味して居るのではないのですが、二人の菩薩に依つて他の菩薩も代表される、まア總代のやうなものです。

佛樣といふのはモウ完全無缺な方でありますから、佛樣の特色といふやうなものはないでせう。特色ナンといふものは、少し偏つて居るから特色があるので、ナニもかもみな具はつて居れば特色もナニもない譯です。佛樣はどんな方だといへば、佛樣は完全無缺な方だといふより外ない譯です。ところが佛樣を御たすけ申して居る菩薩の中に、殊に目立つて見える文殊、普賢といふ二人の菩薩があるのでありますが、菩薩の方にはいろ〳〵な特色があります

すなはち

普賢——理
文殊——智

普賢といふ菩薩は理をあらはして居つて、文殊といふ菩薩は智をあらはして居る、斯う言はれて居ります。現在では學問も科學的の學問がさかんでありま

すから、道理とか智慧とか言ひますと、たゞ物の理窟を穿鑿することのやうに思ひますけれども、一體言へばさういふ意味ではないのであつて、理といふのは、人の世の本當の意味をしつかりと突止めたところを謂ふ。智といふのは、その突止めた考を活用して、生きた世の中を導くためのはたらきをする、それが智です。だから理は靜かな方で、智はそれがはたらく方です、理と智、無論結局は一體でありませうけれども、初めは二つに分れる。

一體人生といふものはどんなものだらう、人間の存在するのは何の意味だらう、天地萬有は何の故に存在して居るかといふやうなことは、それは理ですそれがわかると、それでは人間として世の中にどういふ風に立つたら良いか、人に對してはどんな態度で行つたら良いか、國家の組織はどうしたら良いか家の內の組立はどうしたら良いか、といふやうな事をだん〳〵實際に方つて考へて、さうしてそれを組立てゝ行かなければならぬのでありますが、それが所謂智です、ですから理と智と相俟つて初めて本當の事が出來る、その根本の道理がわからないで、はたらきだけやらうと言つても、それは無理です、いゝ加減にやればやれますけれども、本當の事は出來ない譯です。と言つて理窟ばかり捏ねて居つて實際に役に立たなければ、その理窟といふものもあまり價値の無いものでありませうから、要するに理と智と二つのものが揃つて、すべての事の本當の道理が解つて、さうしてその道理に基いて生きたはたらきが一々あらはれて行く、斯うなれば申し分がない譯であります。

それを此の二つの菩薩に依つてあらはした。此の人生の本當の意味を知る（理）さうして其の知り得たところに依つて人生に於ける一切の行ひを正しくやつて行く（智）衆が意義のある毎日を送り得るやうに、自分もやつて行くし、また他の者も敎へ導い

て行かう、斯ういふのが所謂理智の合一といふか、融合といふか、この二つが一緒になつたところであります。その意味をあらはすに就て、文殊といふ菩薩は智をあらはし、普賢といふ菩薩は理を代表するといふやうに考へられて居るのであります。ですから文殊とか普賢といふ菩薩の名前を見たときに、これは昔お釈迦様の両方に附いて居つた二人の偉い人だといふ風に考へないで、やはり自分達の身の上に引つけて考へて見る、幾度も申すことでありますが、経典を讀むといふことは、自分の身に引つけて讀まなければ何にもならない。理と智が相俟つて用を成した、その通りに吾々も物の道理を根本的によく考へて、それを智として實際に應用して、活きたはたらきをするやうにしなければいけない、さうあつて初めて教を受けた甲斐があるのであります。斯ういふやうに自分の身に引つけて、今の世の中に活かして行くやうに考へることが非常に大事であります。

そこでモウ一人こゝに出て來るのは彌勒といふ菩薩でありますが、これは慈をあらはすといつて、慈心、情けの深いといふことをあらはすのであります。この彌勒といふ菩薩は、末の世といふ、世の中がだん〳〵と混亂してモウどうにも斯うにもならぬやうな、所謂行詰りの時代にモウ一遍此の世の中にあらはれて、さうして世の中をすくふ事を自分の本願として居る、といふ風に言はれて居ります。それが所謂慈心で、本當の情け深い人です。

一體人間の慈悲心といふものは、難難を冒すといふ決心がなければそんなに大して大きいものにはならない。此の事は、これから後もお經を讀んで行くとよく解ることでありますが、本當の慈悲心といふものには、難難を冒すといふ心持が必ず伴ふのです。吾々でもさうです、親に孝行するとか、女房子供に優しくするとか、友人に親切にするとかいふ事を、

惡い事だとは誰も思ひはしない。國家に盡す事でもさうです、ところが懷ろ手をして、鼻唄をうたひながら親に孝行が出來て、國家にも忠義が出來るなら誰でもやれるのです。けれどもいよ〳〵それをやると自分が立行かない、斯ういふ場合に迫つて來て、自分が樂をするか、國に盡すか、自分が美味い物を食ふか、自分は不味い物を食べても親に美味い物を上げるか、つまり自分を捨てるか捨てないかといふ時になつて、初めて本當の孝行も、忠義も、慈悲もそこに光を發するのでせう。樂な時なら誰だつてやります。又樂な時にやつたのは大して偉い事ではしない。苦んでもやる、どんな難難を冒してもやるといふ時になつて、初めて人間の慈悲心といふものが現はれるのであります。そこで慈悲といふ事には心ず難苦といふものが伴ふものだと考へなければならぬ。子供が達者で育つて行く時には、まだ〳〵親の情けが本當に現はれない、子供が一度病氣でもして見ると、親の情けといふものが本當に現はれてくる。『どうか此の子供を達者にしてやりたい、どうか此の病氣を治してやりたい』斯ういふ時になつて初めて親の慈悲といふものが深刻に現はれて、子供も亦身にしみ〴〵と有難く感ずるのでありませうが、すべてがさういふ譯であります。であるから、此の末の世の混亂した時に教を弘めることを志した彌勒といふものが、それが慈悲心の化身であり、慈悲心を中心とした人だといふ風に思はれて居るのであります。

現在の時代などにはそれが殊に必要であります。これから日本はだん〳〵苦しくなるのであります。が、苦しくなつた難かしい時代には、その苦しみに堪へ得るといふ人のみが國の爲に頼もしい人であります。口でどんなに偉い理想を說いても、いよ〳〵これから苦しくなつた時にがつかりして拋り出してしまふやうな料簡の人は、チッども頼もしい人間で

はない。困苦に堪へるといふ事が出來ない人間は、決して世の爲にも人の爲にもなりはしない。そのことを佛敎に於てはよく考へられて居るのであります。

さういふ意味から、彌勒といふ人は、末法の世といふ末の世の中に現はれて、世を救ふことを常に自分の理想として居つたといふので、これを慈心――情けの深い人の模範とするわけであります。

だから彌勒は、此の場合でも衆のことを心配して居る。お釋迦樣の眉間白毫の光がサッと周圍を照したといふことは、一體どういふ意味だらう、自分にも解らんが他の者にも解らぬだらう。だから自分の爲ばかりではない、他の衆の爲にも一つ此の事の意味を本當に知りたい、斯ういふので文殊といふ智慧の最も勝れた方に問うたわけであります、文殊は智慧の最も勝れた人でありますからそれに答へて、佛樣はいつでも最も勝れた敎をお說きになる時には、衆の心を更めさせる、即ち衆に一つの新な心持をもつて、一生懸命になつて聽かうといふ氣分を起させる目的から、斯ういふやうな不思議な事を示されるのだ、といふ返事をした譯です。さういふ意味でこれを讀んで見るとよくわかります。

此のところは前回に一通りお話した事でありますけれども、更に附加へてモウ少し申して置きたいことがあります。

彌勒菩薩は、どうして佛樣がこんな不思議な事を現はされるのか、これを伺ひたいと思ふけれども、佛樣は三昧に入つてヂッと動かずに居らつしやるから、佛樣に直接に伺ふわけには行かない。これを誰に問うたらよからうかと考へて見ると、文殊師利といふ者は智慧の非常に勝れた者で、法王の子といつて、佛樣の世嗣の子とも言はれるクライ智慧の勝れた者である、さうして此の世だけでなく、前の世に於ても多くの佛に事へて修行を積んで、前の世から普通の人とは異つた人間であるから、斯ういふ人に

問うたら解るだらう、と思つた。それは彌勒が自分一人のことを考へたのではないので、その時の大衆の者もみな同じやうな疑問を有つた。即ち佛樣の光明が世界を照した、まことに不思議な相が現はれたといふことは、どうも意味が解らぬ、誰に問うたらよからう、斯うみな思つて居つた。だから彌勒は自分一人の爲ではない、衆の心持をよく察して文殊師利に問うたのであります。一體どういふ譯でこんな不思議な事があるのでせう、どうして佛樣の相からこんな大きな光明を放つて照されることになつたのでせう、今此處で見ると東の方の世界の相がことごとく見える、これはどういふ譯でせう、と言つて尋ねた。この邊は一通り前に申したのでありますけれども、只今申したやうな意味を補つて考へると、さらに其の意味が明瞭になつて來るのであります。

それから彌勒は重ねて自分の問ふ意味を詳しく述べようと思つて、偈をもつて問うたのであります

が、この偈に現はれて居りますところは、佛道修行の種々なる相がみな說かれて居るのです。だからこの中に、東の方に斯ういふ所があるぞと言はれて居ることは、これを遠い昔の事と思つてはいけない、現在の世の中にひき比べて考へなければならぬのです。例へばこゝに種々な事が書いてありますが、佛道の修行をするといふことは何處からでも行けます人間の性質や境遇といふものはみな異ひます、顏つきの異ふ通りに心持も異ひますから、皆が同じ道を辿つて行くといふことは難かしい事であります。しかしながら誠心を以て道を求め、敎を求めて止まなければ、いろ〳〵な所から入つて行つて、結局一つところに行かれるのです。其の事をこゝに能く說かれて居ります。斯ういふ道から行つても良い、斯ういふ道から行つても良いのだといふことを、一々書いてあります。皆さんでも、これをお讀みになつたならば、キッと思ひ當られるだらうと思ふ、自分の

境遇なり性質なりと似たやうな道が何處かに出て來る。『ハハアこれだナ』と思つたら、そこからやつて行けば良いのです。

人間はみな同じといふ譯には行かないものです。親父のやつた通りに息子にやらさうといつても、それはいけない、時代が異ふ、境遇が異ふ、年齢が異ふだから、何の道でも良いから、然るべき道を選んで、そこから入つて行つて結局本當の覺りに行けるやうにしなければならない譯です。そこは融通がきかないといけない。よく私共も相談を受けるのですが、『うちの息子は子供の時には親父と一緒にお寺詣りもするし、親父が佛壇に向つてお經を讀んで居ると、いつでも後ろへ來て一緒にやつて居つたけれども、此の頃どうも生意氣になつて、チッとも親父の言ふ事を肯かなくなつてしまつた、どうしたものでせう』といふやうな話をよく聞くのであります。それはやはり相當な年齢になりますと、物の批判する力――批判といふよりは寧ろ此の頃の風潮で、缺點を探すやうな習慣に周圍中からしみ込んで來るものですから、どうしても子供の時のやうな譯に行かない。それは又研究的の方から入つて行つて、結局信するといふ風の道にも行けるのですから、其の道を歩かせて行くより仕方がないのであつて、親父の歩いた通りを歩かせようといつてもなか〳〵うまく行かないのです。同じ兄弟でも、兄と弟とは異ふ、姉と妹とは異ふといふやうな風であつて、性質、境遇、事情がみな異ふのですから、そんなに千篇一律に行くものではない。ですから、道はいろ〳〵の道がある、その道をどれでも良いから或る一つの道を選んで行けば良いのであります。

さうしてチョウド香のある物に手を觸れて居ると自然にその香が手に移ると同じやうに、どんな道でも良いから尊い佛樣の敎に觸れてさへ居れば、その觸れて居ることに依つて、その敎の尊さが傳はつて

行くのですから、あまり神經質にならないで、何とかして佛に觸れさせる方法を考へる方が良いのであります。ですから私は始終自分の敎へて居る學生に言つて居る、君達にイキナリ佛敎を信じろとは僕は決して勸めない、研究で良いのだ、研究が出來なければ攻擊でも良いのだ、あら探しでも良いのだ、何でも良いからドン〳〵佛樣といふものに觸れて見るが良い、初めはあらを探すつもりか何かでやつても永い間やつて居る內には自然々々に其の方に降參してしまふに異ひない。だから何でも良い、初めから信じろといふことは僕は決して强ひない、と申して居るやうな譯であります。とにかく何等かの方法を以て、この尊い佛及び佛の道に觸れることをするが宜しい。その觸れる方法はいろ〳〵ありませう、決して誰も彼も同じ方法で……といふ譯には行かないのです。又その行かないところに人生の面白味もあるかも知れないと思ひます。

さういふやうに考へて、この偈の文句を自分の境遇と比べあはせて讀んで行きますと、銘々何處かに近いところがあります。その自分に近いところが見つかつたならば『ハハア此處から入るのだナ』と斯う思つて其の道を辿つて行きますと、やがてだんだん深い方に入つて行けるでありませう。その意味で此の偈の文を讀んで戴きたいと思ひます。

偈の初めの方は前回に一通り申したのでありますが、簡單に繰返して讀んで見ますと『文殊師利よ』彌勒が文殊に向つて尋ねるのであります。『導師何が故ぞ眉間白毫の大光普く照したまふ』一切の人間を導いて下さるところの佛樣は、どういふ譯で眉間の白毫から光が出て、あまねく世界を照すやうな不思議な事があるのであらうか。『曼陀羅、曼殊沙華を雨して』天からは白い蓮の華や紅い蓮の華が雨つた、これは天地がみな佛の敎に感動したといふ心持を表はすのであります。

『栴檀の香風衆の心を悦可す』これはチョット面白い話であります。香といふものは、形も色もナニもないものでありますが、人間の氣分をつくるといふ上に於ては、香は非常に大切なものです。斯ういふ部屋に入つて來ても、そこらに花でもあつて何だか芳い香がすると、部屋全體が非常に良い所のやうに感じます。それが反對にコールターが日向で干されて乾くやうな臭でもして居るといふと、頭腦がイラ〳〵して來て氣分が惡くなつてしまふ。香といふものは不思議に人間の氣分を支配するものであります。それで栴檀といふやうな香のある樹の傍に居ると、その樹を吹いた風が自然に芳い香を帶びて來て大勢の人間の心を愉快にするといふのでありますが、これは如何にも面白い事です。人間もその通りであつて、やはり人間の香といふものがあります。其の人は偉い人で、言ふ事は一々尤もだが、其の人に會つた後は何だか氣持が惡い、といふやうな人がある。それから又言ふ事は平凡な事を言つて居つてあまり感心しないけれども、其の人に會つた後は何となく氣分が好い、といふやうな人もあります。それは何と言ひますか、難かしく言へば其の人の美德とでも申しますか、永い間心を練つて修行して居る人といふものは、ナニも變つた事を言はないでも變つた事をしないでも、其の人に會つた後の氣分が好い、さういふ心を修めるといふ事をしない人は、どんなに智慧があつても、手腕があつても、それは事業はするだらうけれども、會つた人に好い感じを與へるといふことは出來ない。そこが非常に大事なことであります。

一軒の家庭の内でもさうです。親子兄弟夫婦が揃つて、晩飯の膳に何の御馳走が無くても、お互に顏を合せて、お互に好い氣持でもつて晩飯を食べるといふ事、それが家の内の一番大事なことであつて、それが出來なければ、同じ家の棟の下に一緒に住んで居るといふ事の意味は無い譯です。取立てゝ此處が善いとか、此處が惡いとかいふ事よりも、何だかお互に向ひ合つて居つて好い氣持がするといふ、そこが大事です。それが出來なければ眞實の仕事は出來ないのであります。友達でもさうです、友人同士會つて、何をして遊ばうかといふやうなことを言ふ友人は、本當の友人ではない。お互に何をしないでも、たゞヂッとして物を言はないで向ひ合つて居つて兩方が氣持が好いといふ、さういふ友達が本當の友人なのであります。

私は數年前に英吉利に參りまして、倫敦で、有名な文士のカーライルといふ人の住んで居つた家があります、その家を見に參りました。其の家には地下室が一つありまして、その部屋に爐があります、此の會館にあるやうなハイカラなストーヴではありません。昔の爐です、非常に質素なものです。そこへ案内者が私を案内して説明をして臭れましたが、此の部屋は實に面白い所です、此の爐で石炭を燃やして、カーライルが此邊に腰を掛けてヂッと物を考へて居る、さうするとそこへ友人のテニソンといふ有名な大詩人が訪ねて來る、さうして其の爐の前に腰を掛けて、お互に『ヤア』『ヤア』と言つたきり何にも言はない、二人で爐を圍んで腰掛けて、カーライルは考へて居る、テニソンは時々煙草をブカ〳〵吹かして居る、それで一時間でも二時間でも居るけれども、何にも話をしないといふ、さうして又『左樣なら』と言つてテニソンは歸つて行つてしまふ。それが此の二人に取つて實に樂しい事であつたらしい。テニソンは時々やつて來ては爐を圍んで、たゞ煙草をのんで歸つて行つたさうです、斯ういふ話をして居りました。私はこれを聞いて非常に感じました、本當に人間がお互に相信じ、相許すといふことになれば、それでなければならぬ、話をして見てはじめて感心するナンといふのはまだ本當ではない、

たゞ向ひ合つて默つて居ても、互に、此の男と一緒に居るのは愉快だといふ風に、默つて向ひ合つて居てそれきりで別れて歸つて行くといふやうな、斯ういふ友人こそ本當の友人である。親友といふものはさういふものだらう、といふ事をツク〳〵感じたのでありますが、現代の社交といふものはチャウド其の正反對です。現代の世の中の交際といふものは、心にも無い事ばかりお互に話して居るでせう、何と言つて話の種を見つけたら宜いか、それに苦心して居る、だから『今年はまだ櫻は咲きませんネ』『まだ咲きませんナ』『どうも寒うございますネ』『寒うございますナ』……そんな事ばかり言つて居る。何の爲に時間を潰して居るのかわからない、まことにそれは詰らない話です。本當に人間が相信じ、相許すといふことになれば、今のカーライルとテニソンのやうな交際になる、心と心と相照せば宜い、それが本當の交際です、『栴檀の香風、衆の心を悅可す』といふのは、それを謂ふのであります、栴檀の香がサーッとして來ると、自然に衆の心持が好くなるといふ、勝れた人がそこに居れば、何にも言はないでも、何にもしないでも、その周圍の人が自然にその人の感化を受けまして、さうして衆が默つて居つて好い氣持になる、さういふ風になりたいものであります。吾々はたゞ口先でお話をするだけで、一時間喋べつて見ても『彼奴はよく喋べるナ』と思はれるクライのことで、まことに羞かしい事でありますが、本當を言へば喋べらぬでもドッシリと坐つて居つて、自然にその周圍の人がよろこぶといふやうになれば本ものであります。宗教の極致といひましてもやはりそれです。その意味が說かれて居る、天から華が雨つて栴檀の美しい香の風がサーッと吹いて來て、そこに居る大勢の人間が何だか好い氣持になつたといふ。佛樣の前に居る者はキッとさうであつたでせう、佛樣はナニも仰しやらない、デッとして居られるだけで、その前に居る者はみな好い氣持になる、何だか身中が、心の奧の奧まで非常に微妙な香で包まれたやうな氣分になつたことでありませう。

『是の因緣を以て地皆嚴淨なり』勝れた人の居る所は地面がみな美しく見える、人間といふものが世界を造るのであります。だから人間が善くなれば、世の中は善くなるにきまつて居る、佛樣が居らつしやつたら、佛樣の居るやうな所はみな善い場所で、厭な所といふものはありはしない。さういふ譯で佛樣の光が周圍を照すので、土地がみな美しく淨らかになつてしまつた、何だか何處も彼も有難い場所のやうに思はれるといふのであります。『而も此の世界六種に震動す』これは前に申したやうに、地面が動くといふのは、天地が皆佛の德になついて、佛の御力に感激したことを表はして居ります。『時に四部の衆、咸く皆歡喜し』佛樣の敎を聽きに集まつた出家の人も在家の人もみな歡喜を感じた『身意快然として未曾有なることを得つ』心の中が何だかはればれして、今まで曾て覺えないやうな好い氣持になつた。

『眉間の光明、東方萬八千の土を照したまふに皆金色の如し』佛の眉間の光が遠い所まで照したのに、そこがみな金色の如く光に滿ちて見えた。『阿鼻獄より上は有頂に至るまで』無間地獄から上は有頂天といふ天上のまた上の方まで『諸々の世界の中の六道の衆生』地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天といふいろ〳〵の境界の相がみな見えた。『生死の所趣』さういふ衆生が生れかはつて何處へ行くかといふ、その趣くありさま『善惡の業緣、受報の好醜』善い惡い、さま〴〵な行ひをする、そのさま〴〵な行ひに依つてその結果がそこに報となつて現はれるのでありますが、さういふやうな事がみなわかる。その報を受けた場合に、好い報を受けることも、惡い報

を受けることもわかる。『此に於て悉く見る』此に於てといふのは、今自分達が此處に坐つて居つて、さうして方々の世界のさういふ關係がみなスッカリわかるといふのです。

これは佛教ではいつでも業報と申しまして、業と報とがある。業といふのは自分の行ひです、それに依つて報といふその行ひの報を得るといふのです。これは別に說明をしないでもわかる事です、勉强すれば及第するし、怠ければ落第するといふことは、小學校へ行つて居る兒童から知つて居る事であつてやはり業と報です。業は自分のはたらき、報はこれに依つて生ずる結果であります。そこで其の報といふものを分けると

報——正報
　　——依報

の二つになります。正報といふのは自分の身と心です、依報といふのは自分の境遇です、今ここで爲した自分の行ひに依つて、正報すなはち自分と心と身との現在の狀態が決定される、また自分の身の置かれるその境遇も決定されるのであります。例へば私が今此處で斯うやつてお經の話をして居るといふことは、私は今日午後六時に自分の家を出て來たのですが、今日の六時までにやりました一切の私の業、しごとに依つて、私の身と心——今御覽の通りの身を以て斯うやつて此壇に立つて居る、これが決定つて居るのです。それから又私の境遇、私は音羽の六丁目の統一會館に來て、斯うして喋べつて居るといふことが境遇ですが、その私の境遇も決定つて居る譯であります。私の現在の身、私の現在の心、私が現在何處に居つて何をして居るかといふ境遇、これは此處に至るまでの私の業の結果です。私が生れてから今日の午後六時までの間にズッと續いて爲し來つた業に依つて、現在の私の身と心（正報）と私の置かれる境遇（依報）とが定められて居るのであります。さうして現在私は此處で法華經の講義をして居りますが、この法華經の講義をするといふ業、このはたらきに依つて、今晩から明日にかけて私がどんな身を以て、どんな心を以て、どんな境遇で何をするかといふ事が決定されるのであります。

でありますから、これは少し亂暴な事を言ふやうですが、いつでも人間は、現在といふものは無い。現在といふのは便宜的にきめたことです。過去と未來あるのみで、本當の現在といふものはありはしない。此會館へ來た時は、私は今日の午後六時四十分頃に來たのですが、モウ今日の午後六時四十分も、七時も過去になつて過去つてしまひました。私が此の檀上の机の前に立つたのは七時チョット過ぎでしたが、今はモウ八時に近いのですから、七時十分も七時二十分も過去になつてしまつた譯です。現在といふものは極く短い、『現在』と言つて居る間に現在は過去になつてしまふ。だから現在といふのは、便宜的の語を用ひて、此の短い所を捉へて言ふのであつて。要するに過去と未來であります。その過去の業が未來の報を生むのであります。今までの業が今の私を造つて居る、今の私のやつて居る事が、これから後の私を造るのです。いつでも業と報——業と報と、續いて行くのであります。此の報を受けることは誰も代る者なしと佛樣が言つて居られますが、その通りであつて、誰も代ることは出來ないのです。

それですから、お互が一刹那たりとも自分の行ひを眞面目にしなければならぬといふのは、其の爲なのであります。これから後の自己を決定するものは今の自分である、明日の自己を決定するものは今日の自己である、明年の自己を決定するものは今年の自己である。これは自分自身で決定するより外に誰がどうして呉れる譯でもない。人が助けて呉れると云つたつて、自分が零のところに持つて來て助けて貰ふのは何の役にも立たないのです。私はよく小

さい子供に言ふのですが、お前達は加へ算のつもりだからいけない、世の中の事はみな掛け算だと思へと言ふのです。『自分が骨を折らないでも人が骨を折つて呉れゝば何とかなるだらう』……それは加へ算です。自分の努力をAとし、人の努力をBとすると

A＋B＝C

になると思つて居る、加へ算の料簡で居る。だから自分の努力が零だつて、人の努力が少しあれば、やはり結果が現はれると思つて居る、とんでもない話であります。信心するにもサウ思つて居る、『自分は怠けて居つても、佛様に頼んだら金が儲かるだらう』……加へ算ですネ。それで朝寝をして宵寝をして酒を飲んで團子を食つて、時々十錢の白銅グライを奮發してお賽錢を上げてバチ〳〵とやつて『何とかして呉れさうなものだ』ナンと言つて居る。それはいかん、自分が零であつて何が出來るものか。自己といふものが零だつたら何もかもみな零になつてしまふ。だから世に立つ上に於ては加へ算のつもりではいけない、掛け算でなければならぬ。自分といふものがAで、周圍の助けといふものがBであるとしたら、これを乘あはせてCになるのである。

A×B＝C

さうするとAといふ自分が零であつたら、これに何をかけてもみな零になつてしまふ、零に百をかけても、千をかけても、やはり零になつてしまふ。だから掛け算のつもりでやらなければいかぬと言ふのであります。信心でもさうです、自分が零では、觀音樣でも、不動樣でも、阿彌陀樣でもみな駄目です、零に觀音樣がくつついてもやはり零になつてしまふ不動樣がくつついてもやはり零になつてしまふ。自分がしつかりしなければ、他から附いた力ナンといふものはみな零になつてしまふ。だからこれは掛け算と思つてやらなければいけない、加へ算と思つて

はいけないといふ事を始終言ふのでありますが、どうも加へ算流儀が多くていけません。自分が馬鹿だと、親の財産がいくらあつても一文無しになつてしまふ、掛け算です、馬鹿な息子が零です、それに親の財産を百萬圓かけても、結局零になつてしまふ。斯ういふ風に、世の中は掛け算である、自分が零だつたらみな零になつてしまふといふ事は、よほどしつかり考へて置かなければいけないことであります

それですから佛樣を信心して、佛樣の力が加はるといふ時には、いつでも自分の努力に加はる、斯ういふ風になるのでありまして、自分が零であつては何にも加はらないのであります。そこの所がよく考へられないと、總てが駄目になります。それで『善惡の業緣』とある、善い惡いの行ひ、緣といふのは其の行ひをするところの周圍の境遇事情であります その善惡の行ひに依つて、報を受けるにも、好い報を得ることもあれば、惡い報を得ることもある、要するに自分の行ひに依つて、それに相當する報が得られるのであります。

それはヂッとして考へて居ると、佛の眉間の光でみなそれ等のものが見えて來るといふ。地獄も餓鬼も畜生もみな吾々の心の中に在るのであります。ですから吾々が眞面目に坐つて考へて居りますと、どういふ行ひをする人はどんな結果になる、どういふ行ひをする人はどんな報があるといふことが、みなそれ〳〵判つて來るといふことを敎へられて居るのであります。

因果の關係といふものは決して狂ふものではないといふのが、佛敎の根本の思想であります。信心をするといふことは、自分が惡い事をして居て、それを信心に依つて善い結果を得ようといふことではなくして、信心をすることに依つて自分自身の心が立直るといふことです、それが信心の根本の意味です 自分の事は自分でやらなければならない、御利益が

あるといふことは、自分が造り直されるといふことです、それを間違へてはいけない。信心をして御利益があるといふことは、信心することに依つて自分が改造される、自分が生れかはつた者になるといふことです。自分が元の杢阿彌で居つて、佛樣が何とか仕事を手助けをして呉れるだらう……と思ふのは淺薄な考です、そんなことが出來るものではない。その事はお經を讀んで見るといつても言つてある、善い事惡い事みな自分が受けるのです。そこで自分といふものはまことに淺薄なもので、凡夫で煩惱だらけのものであるから、だから信心することに依つて自分を造り直して行く、自分が造り直されさへすれば、どんな境遇に居つても、境遇などに負けるものではない、そこが御利益といふものであります。

人間といふものは、本來はそんな迷はないのでありませうけれども、いろ〳〵面倒な境遇を通つて居るから、その境遇に應する際に於てさま〳〵な迷が出て來るのです。だからそれを取除きさへすれば、さうして本來人間の有つて生れたばかりの時のやうな心持になれば、世の中は樂々と渡れるものだらうと思ひます。

私は學生時分によく脚氣を病んだものですから、水泳といふものを知りません。中學校で水泳を習ふのでありますが、私は其の頃毎年夏になると脚氣が發つて泳げなかつた。それでまことに殘念ですけれども水泳を知りません。自分の子供には習はして居りますが、自分は泳げない。殘念ですから、水泳の先生を訪ねて水泳の理窟だけを聞きました。畠水練と謂ひますが、畠どころではない、私のは机水練で机の上で聞いた水練であります。いろ〳〵な水泳の先生に會つて、水泳の事を聞きました。『どうも吾々が水の中に入るとブクブクと沈んでしまふが、どうして浮くのだらう』さうすると水泳の先生が言ふ

には、『イヤ人間の體といふものは浮くやうに出來て居るのだ、だからヂッとして居れば浮くのだ』どの先生もみなさう言ひます。『動かずにヂッとして居れば人間は浮くやうに出來て居る、それを水の中に入ると慌てて手足などを動かして藻掻くものだから、自分で自分を沈めてしまふのだ、だからヂッと動かずに居ろ、さうすれば浮くにきまつて居るのだ』先生はみなさう言ひます。けれどもサア水に入つた時には動かずには居られない、苦しいからツイバタバタやるのでせう、さうすると沈んでしまふのださうです。私はその話を聞いて、實にさうだナと思ひました、動かずに居れば本來浮くことの出來る人間が、下手に動き廻るので沈んで死ぬのだといふ。人生の事もその通りであつて、本當に自分の有つて生れた本性の儘で生きれば生きられるのだけれども、途中からいろ〳〵迷がおこつていろ〳〵藻掻いて騒ぐものだから結局迷の底に沈んでスッカリ駄目になるのだナ、といふ事を痛切に感じたのであります。

であるから佛の教を學ぶといふことは、ナニも變つた事を習ふのではなくして、人間の本來有つて居る性質を取返すことだと考へなければならない。間違つた道をあれこれ選んで居るために、だん〳〵深味へ沈むのだから、佛の教に依つてさういふ迷を取除かれて行きますと、人間の本來有つて居る性質が蘇生つて來るのだ、斯ういふやうに考へて可いのであります。其の事は法華經のだん〳〵後の方を讀んで行きますと、長者の子供が方々流浪して、それから復た親爺に邂逅つて舊の長者になつたといふ譬喩がありまして、吾々が佛樣のお弟子になつて覺を同じうすることが說かれて居りますが、その意味であります。吾々はどうかして本來の性質に基いて行けば可い、だから無理な事ではない。佛教といふものが吾々に無理を教へるものならば、誰にでも出來る事ではありませんけれども、人間の本來の性質を全

うする教なのであるから、氣がつけば誰でも出來る事なのであります。今、水泳のことに就て、體を動かさずに居れば浮くといふのと同じことです。それが本當に解つて、ヂッとして居りさへすれば浮くのであります。それと同じやうに、迷が無くなつてヂッとして居れば、本來の性質が蘇生つて來るのでありませう。そこの所は口で言ふのはやさしいけれども、チカ〳〵難かしい事です、實際やつて見ますといろ〳〵な迷が出て參りますが、まア本來の理窟はさういふやうな意味であります。

それで善いも惡いも自分の心の持ち樣でありますから、自分がヂタバタ騒いでつまらない迷の爲に執はれるといふ事がなくなれば、そこに自から安樂なる天地が開かれる譯であります。

『又、諸佛聖主師子』聖といふのは煩惱を離れた意味、主といふのは大勢の人間の上に立つて教へ導く力がある人といふ意味です。『師子』といふのは佛樣や師子に譬へるのでありますが、この師子に譬へるといふ意味は、普通には獸の中で師子が一番强いから……といふやうに思はれて居りますけれども、それではまだ十分の意味を盡して居ないのです。師子の座と申しまして、佛樣が教をお說きになる時に腰をかけられる椅子のことを師子の座といひます、それは實際に於ても師子が彫りつけてあつたらしい。國王の腰かける椅子なども師子を彫つて居つたさうですから、師子といふものは印度では昔から重んぜられて居りました。隨つて最も勝れたものといふ意味に、師子といふことがしば〳〵使はれたらしい、けれどもたゞそれだけではない、モウ少し他の意味があるのです。といふのは、すべての獸の中に於て、師子といふ獸はいつでも力を弛めることのない獸である、懈けるといふ事がない、それが偉いところです。他の獸は、相手が弱いといふと、『何だこんなつまらない奴……』と思つて油斷をする、だ

から負けることがある。師子といふものはそんな事はない、どんな弱い相手でも全力を注いでこれに向ふ、そこが師子の特色だと言はれて居ります。古い語に『師子、兎を搏つこと、なほ象を搏つがごとくす』といふことがあります。兎といふのは小さい獸ですから、師子のやうな强いものが一つパッと搏てば倒れるにきまつて居るでせう。けれども師子は兎を搏つ時に、大きな象を相手に鬪ふのと同じやうに油斷をしないで、力を一パイ籠めて搏つといふ、だから決して間違はない。他の獸は、相手が弱いといふと馬鹿にしてかゝるものだから、時々逃がしたりしてうまく行かぬ、といふことを言はれて居りますが、それが佛樣に譬へられるところであります。

ほんとうに勝れた人は、相手を馬鹿にするといふ事はないものです、相手を馬鹿にするといふのは、まだ本ものではない。『利口な者には自分の言ふ事がわかるだらうけれども、愚な者にはわかるまい』といふやうなことを考へてはいけないのであつて、佛樣の眼から御覽になれば、一切の人間はみな吾子である、さうして善人であつても惡人であつても、智者でも愚者でも、修行を積んで行けばやがては佛の境界にも行けるものだ、といふやうに考へて居られるのでありますから、どんな人間に對してでも、いゝ加減にするといふ事はない。そこが師子に譬へられて居るところであります。いつでも全力を注いで、どんな小さい子供に教へる時でもいゝ加減にしない、やはり大人に教へると同じ熱心を以て說かれる、どんな乞食のやうな者に說く時も、國王の前に立つと同じ心持で說かれる。相手に依つて說き方をいゝ加減にしたり、出たらめを言つたり、間に合せをしたりするといふことは、佛樣には無いのです。それを師子に譬へてあるやうであります。これはよほど考へなければならぬ事です、まア私共始終お經の話などをして居りますけれども、後から考へると

差かしいことで、時々間に合せをやる。『ナーニ此の位は大丈夫だらう』ナンと思つて居ると、さういふ時に限つてよく又人が缺點を見て居るものです。相手が子供だナンと思つて馬鹿にして居ると、子供がなか〳〵大人より偉かつたりしまして、どうも危いものです。いつでも吾々はすべての人に對して心を緩めてはならぬ、すべての仕事に對して怠慢の心持があつてはならぬ譯であります。それを師子といふことに譬へてあります。

『經典の微妙第一なるを演說したまふ』佛樣は敎のもつとも勝れたものをお說きになる『其の聲清淨に、柔輭の音を出して』柔輭といふのは人の心に入り易いことです。敎といふものが、人に不愉快な感じを起させたり、或は人に反抗心を起させるやうな敎であつては、たとひ其の內容がかなり良くても、決して敎化の功を收めることは出來ないものであります。ですから柔輭の音といつて、聞く人が自然にその敎に懷いて行くやうに、人の心に入り易いやうな聲で佛は敎を說かれるのです。

『諸〳〵の菩薩を敎へたまふこと』菩薩といふのは、所謂大乘の道を學んで行かうといふ者をお敎へになる『無數億萬』その數は非常に澤山な數である。『梵音深妙にして人をして聞かんと樂はしめ』梵といふのは清淨な聲であつて、非常に奧ふかく、人の心に不思議に響きわたる聲であつて、聞く人がみな『どうぞあの佛の敎をいつまでも聞いて居たい』と思ふやうな、實に微妙な聲で敎をお說きになる。

『各〳〵世界に於て正法を講說し』各の佛樣が正しい敎をお說きになる。正しいといふことは、佛樣の智慧を正徧智と申します、佛樣は物を知るのにどういふ風に知るかといへば、正しく徧く知るといふのであります。人間は、物を澤山知つて居るから偉いといふものではない、澤山知つて居つたつて、いろ〳〵知つた事が混線してしまつて、結局何の爲になるかわからないといふやうな知り方では仕樣がない。此の頃はどうもさういふ風なのが流行ります。若い人などは、話して見ると何でも知つて居る、何でも知つて居るやうで結局肝腎な事は何にもわからない、あれもこれも知つて居る、けれども統一がつかない、それでは何にもならないのです。ですから徧くすべての事を知るといふことは必要ですけれども、それを正しくといふのは、その知つて居る事がチャンと中心を有つて居なければいけない。中心の無い知識といふものは役に立たぬものです、たゝあれもこれも知つて居るといふ散漫な知識は駄目ですいつでも正しくなければならぬ、正しいといふのはチャント中心があつて、その知識そのものが統一を有つて居る。それでなければ物を知つた甲斐はないのです。ですから佛の物を知られるのは、いつでも正徧智で、正しく徧く知るといふのであります。此の頃では、徧の方は大分行き渡つていろ〳〵の事を知つて居るが、正の方は一向注意されない傾向があるのであるから、いろ〳〵の事を知つて居るが、結局何だか譯がわからぬといふことになるのであります。中心があつてはじめて物が統一される、心棒が無くてバラ〳〵では役に立たない。それが非常に大事なことであります。そこで正法を講說する、正しき敎を說かなければならない。たゝいろ〳〵な事を敎へて物識にするといふやうなことでは、ほんとうに人を敎へる道ではありません。

『種々の因緣と無量の譬を以て佛法を照明し』いろ〳〵の方法をもつて世間の人に解らせるやうにする、さうして『衆生を開悟せしめたまふを覩る』大勢の人間をさとらせる。さとるといふことは、轉迷開悟といつて、迷を轉じて悟を開くのであります。一體人間は誰でも相當な智慧を有つて居るのです、たゞその智慧の向けどころが間違つて居る。眼があれば物を見るし、耳があれば物を聞くし、鼻があれ

ば香を嗅ぐし、相當な知識はみな有つて居る。たゞその有つて居る知識の向けどころが惡いから、いろ〳〵な事を知つて居るが、それがチッとも役に立たないのです。だから迷を轉ずるといつて、その迷つた方に向いて居る心持を向けかへれば可い、さうすれば悟つた方になつて行くのです。書物を讀んでもいゝ、加減な所ばかり讀んで居ると、いくら讀んでも役に立たぬのですが、その讀む場所を變へれば、昨日十分間讀んだのが役に立たなくても、今日二、三分間讀んだのが役に立つといふ事もあるのであります。要するに迷つて居る心の向け方を變へれば可いのでありますから、佛樣は、迷を轉じて悟を開かせるといふ。ナニも全然變つた事を佛樣は敎へる譯ではない、吾々の心の向け方を變へて下さる。そこで衆生を開悟せしめるといふ、迷つた心持を捨てさせて正しい方に向かせるのであります。

『若し人苦に遭ひて老病死を厭ふには』人間が世の中の苦に遭つて、こんな厭な世の中はない、こんな世の中に斯うやつて居れば、だん〳〵年老つて行くだらう、病氣をして死ぬだらうといふやうに、世間の儚いことに對して厭世的の、何となく心細いやうな感じを起す者に對しては『爲に涅槃を說きて』涅槃は『滅』といふ意味であります。涅槃といふ字はいろ〳〵な譯がありますが、直譯すれば滅といふことです。滅といふのは、いろ〳〵な滅の仕方があります。死ぬのも一つの滅です、命がなくなる、だから死ぬことも涅槃といふ。それからモッと深く言へば、迷をなくすのも滅です、それが本當の意味です。こゝではそれを言つて居ります。世間の苦や迷つて居る心持で世の中が厭だ〳〵と言ふから、そんな人間に對しては迷を滅する方法を說いて『諸苦の際を盡さしめ』苦のありたけをみな滅くさしてしまふ。人間は迷つて居るから苦しいのだ、迷がスッカリなくなつてしまへば苦といふことはない。

斯う敎へられる。

『若し人福有りて佛を供養し』この人は非常に幸福な人で、此の世に生れて來る前の世から佛に緣があつて、佛樣におつかへ申して『勝法を志求するには』どうか人間と生れた以上は、普通の事ではいけない、世の中を救ふやうな心持になりたい、勝法といふのは非常に勝れた法です、自分一人が助かつて居るといふのではつまらない、世をも人をも救ふやうなそんな良い道が欲しい、斯ういふ心持を持つて居る者もある。さういふ心持のある者には『爲に緣覺を說き』緣覺は緣によつて覺るといふのですから、自分達の日常遭遇する事柄によつて覺をひらいて、さうして世間に執はれない心持をつくつて、モッと勝れた淸淨な心持になつて行け、斯ういふことをお敎へになる。

『若し佛子有りて』それよりモッと勝れた、佛の本當のお子樣とも言はれるやうな者もある、佛子といふのは、いつでも慈悲の心持のある者を謂ふ、慈悲の心持といふものがなければ、どんな智慧があつても人間は救はれるものはでない、『人はどうでも宜い、自分さへ……』と思つて居る間は、世の中は爭ひばかりです。自分を捨てるといふ心持があつてはじめて人間は救はれる、能捨といふことゝ能施といふことはいつでも伴つて居るのであります。捨てられる人が施せる人であつて、捨てられない人は施せるものではない、何でも『俺のものは……』といつて取込まうといふやうな人は、人に施すことなど出來るものではない。さういふ人が偶に施すと、それは報を求める爲に施す、それではいけない。報を求めるつもりで施すナンといふのは、施しではありはしない、だから能捨の心持でなければいけない。三陸地方の海嘯で大變な慘害ださうだといふので、奮發して三圓義捐金を出した、ところがいつ迄經つても新聞に名前が出て來ない、『どうも怪からん』

と言つて怒つて居る、それならやらない方が宜い。僅かの金を出してもスグ新聞に書かれないと承知しないといふやうな料簡では、甚だ困つたものです。電車の内で『お婆さん、此處へお掛けなさい』と言つて席を譲つたのは宜いが、お婆さんが默つて腰を掛けてしまふと『この婆ア何だつて禮を言はないのだ、怪からぬ奴だ』と言つて腹を立てる、それでは駄目です。捨てる心持がなければ、施しでも施しになりはしない。だから能捨の心と能施の心とがいつでも伴ふのです。自分の利害を捨てようといふ心持そこに初めて人に施すことが出來る、それが『佛子』本當の佛のお弟子であります。その心持があると非常に氣が樂です、施すことがそれが良い氣持になるナニも報などは求めませんから、非常に良い氣持です。さういふのが本當の佛の子です、佛の所謂慈悲心をうけついだ者であります。

さういふ佛子があつて『種々の行を修し』所謂菩薩行といふ。（菩薩行のことは後に詳しく申します）菩薩としての行を修行する、さうして『無上慧を求むるには』無上慧といふのは佛樣の智慧を謂ふ、佛樣と同じやうな智慧を具へるやうになりたいと思ふ者には『爲に淨道を說きたまふ』淨き道といふのは所謂菩薩道です。菩薩といふものは前にも申したやうに、自分だけに執はれない心持ですから、それを淨いといふ、いつでも俺が〳〵と思つて居る間は淨くない菩薩道すなはち一切衆生を救ふ爲に力をつくす、その大事な道を佛は說いてお聞かせになる。

『文殊師利、我此に住して見聞すること斯の如く』自分はこの娑婆世界に居りながら、佛樣の身から出た光の中に於て、斯の如き佛樣の不思議なはたらきを知ることが出來た、『千億の事に及べり』その他いろ〳〵な事を自分は見ることが出來た。『是の如く衆多なるを、今當に略して說くべし』一々さういふ事を言つて居ると數限りないけれども、今略して

ザッと、佛の數がどんな結果を生じたかといふことを、自分の考に浮んだだけを話して見ようといふので、これから所謂佛道修行のさま〳〵な相に說き及ぶのであります。

我彼の土の　恒沙の菩薩
種種の因緣をもて　佛道を求むるを見る

（我見二彼土恒沙菩薩種種因緣而求二佛道一）

彼の土といふのは他の世界でありますが、他の世界も此の世界もつまり同じことなのであります。その世界に於て、佛の眉間の光がサーッと照した、その光の中に斯ういふことが見える。その國に於て、恒河の沙の數ほどの數限りない澤山の菩薩たちが、種々の因緣を以て、佛に成りたいといふことを目的として修行するありさまが見える。

或は施を行ずるに　金銀珊瑚
眞珠摩尼　硨磲碼碯
金剛の諸珍　奴婢車乘
寶節の輦輿を　歡喜して布施し
佛道に回向して　是の乘の
三界第一にして　諸佛の歎めたまふ
所なるを得んと願ふ有り

（或有二行レ施金銀珊瑚眞珠摩尼硨磲碼碯金剛諸珍奴婢車乘寶節輦輿歡喜布施回二向佛道一願レ得二是乘三界第一諸佛所レ歎上）

その中に施を行ずるといつて、人に物を施すことをする者がある。その布施をするのに、金銀とか珊瑚とか、眞珠とか摩尼（珠）とか、硨磲、碼碯、金剛といふやうな珍らしい寶や、或は自分の奴婢だの車乘だの、飾のついて居る輦だの輿だの、さういふものを歡喜で布施して、さうして佛道に回向するといふことは、自分が善い行ひをした結果として、自分も佛のやうなものに成りたいと望むことです。回向するといふのは、或る一つの目的に向つて皆捧げることであります。自分は今凡夫だけれども、ど

うか佛樣のやうな、方になりたい、それには、佛といふものは大慈悲を以て一切衆生をお救ひになる方であるから、そこで佛の行ひを學んで、せめては自分の力の許す限りすべての物を人に施して、大勢の人を幸福にしてやらう、斯ういふ事を續けて行つたならば、必ず自分も佛に成るだらう、斯ういふ心持で居る。それが佛道に回向するといふことです。佛の境界に行くといふことを目的として、いろ〳〵なよい事をするのであります。

『是の乘』といふのは、この佛の道といふことです乘の字はいつでも道もしくは敎のことであります。佛に成る道の三界第一、どの世界に於ても第一であつて、諸〳〵の佛樣がこれこそと言つてお歎めになり允して居られるところの、その本當の道を得たいと願つて居る者もあるといふのであります。

これが佛道修行の一つの方法であります。即ち世の中の人の爲に力を盡すことを努めて、さうして自分が佛の境界に近づくやうになりたいと望んで居るのです。これは斯ういふやうに考へなければいけない、濡れたものがあつてそれを乾かさうと思へば、何處へ置いたら宜いかといふと、火の上に翳して置いたら宜いでせう。また乾いたものがあつてそれを濡らさうと思つたら、水の中に浸けたら宜いでせう吾々は凡夫であつて、動もすれば『人はどうでも自分さへよければ……』といふ心持がおこる、そこから世の中は面倒になるのですから、その凡夫の『自分さへよければ……』といふ心持を除かうと思へばチョウド乾いたものを水の中に入れるやうに、また濡れたものを火の上に置くと同じやうに、自分を捨てるといふ行ひを積むより仕方がない。濡れたものを乾かさうと思へば火の上に置かなければならぬ、俺が〳〵といふ心持をやめようと思つたら、己れを捨てゝ世の中の爲に盡すといふ行ひを勵むより仕方がない。それは初めは骨が折れます、誰しも人間は

自分の都合の好い事を考へて居る、その考へて居る心持と正反對の、己れを捨てゝ人の爲に盡すといふことをやるのですから骨が折れるけれどもそれを續けて居る間に、それが喜びとなつて來る。さうすると佛樣に近くなれる、それを言つて居るのです。

布施をするといふことは、要するに自分の欲を捨てゝ人の爲に盡すことです。今この經文には品物が擧げてあるけれども、品物でなくてもよろしい、人の爲に骨折つてやることでも結構です。その努力を續けて居るとそれが愉快になつて來る。さういふ風にして結局はやがて佛のやうになる、佛は一切衆生を救ふといふ非常な慈悲心をもつて世に出て敎をお說きになるのであります、その佛の境界に近づくやうにといふ目的を以て、常に世の爲、人の爲に力を盡して居る、斯ういふ者もあるといふ、それが佛道修行の一つの方面であります。即ち布施の行であります。

そこで布施をするのには、淨施と不淨施といふ區別があります。淨施といふのは、人に施すことが自分の喜びであるといふ心持を以て施すこと、不淨施といふのは、人に施すことに依つて直ちに報が欲しいと思ふことであります。不淨施は菩薩の行にはならない、淨施でなければならぬ、施すことその事が喜びでなければならぬ。こゝに謂ふ布施は無論淨施の意味であります。

世間の慈善事業といふやうなものは、動もすると不淨施になつて來る。斯うしたら名前が世間に高くなるだらうとか、人が尊敬するだらうとか、評判が好くなるだらうとかいふやうなことでやつて居るのですから、それは不淨施であります。施すことが喜びでなければならぬ、さうすると自然々々の間に小さき自己に執はれる心持が無くなるので、自分の氣のつかない間に、少しづつでも佛の境界に近づいて行けるのであります。それは永い間かゝらなければ

ならぬのでありませう、吾々は凡夫でありますから一足飛びに佛樣のやうにはなれませんけれども、さういふ事を始終心がけて居れば、だん〳〵人に施すことが喜びになつて參るのであります。

小さい例を申しますと、私二、三年前に西洋を少しばかり歩いて來たのですが、公園に行つてベンチに腰を掛けて居ると、足のところに雀が寄つて來るそれから鳩なども飛んで來て肩にとまつたりする。日本ではまるで反對で、人が行くと雀や鳩は逃げてしまふ、西洋のは人が行くと寄つて來る。倫敦あたりでは、公園の池の側に立ちますと、何にもやらないのに魚が寄つて來る。これも日本では反對で、人間が行くと魚は逃げてしまふ、船が港へ寄ると、磯部さんなどは多年船に乘つて居られたからよく御存じですが、船が着くと鳥が寄つて來る、これも日本では反對で、船が港へ着くと鳥などは逃げてしまふこれも面白いので、始終何かやるくせがついて居るから鳥が寄つて來る、日本では子供が石をぶつけたりするから、人の顏を見るとみな鳥が逃げてしまふ公園の池に行つても、イキナリ棒などを突込んだりするので、魚がみな逃げてしまふ。西洋では——西洋人が偉いわけではないが、習慣でみな石などはぶつけない、パンの屑などをやる。だから人の影が見えると、又呉れるだらうと思つて寄つて來る。鳥などは非常に氣持の良いものです、船が港へ入ると、パンの屑などを呉れることを知つて居るから、鳥がバーッと寄つて來る。それを見て私はック〳〵思つた、これはやはり習慣である、與へるといふ習慣さへつければ、鳥でも獸でもみな人間に親しんで來る石をぶつけたり何かするから、日本の鳥は人間を見ると逃げてしまふのです。

これは小さい例でありますが、心のある者は、心と心と相應じないといふ譯はない。ですから人がみな與へる心持になつたならば、やはり港で鳩が寄つ

て來るやうに、公園のベンチに雀が寄つて來ると同じやうに、世間が親み得るのではないか。今の世の中にそんな事を一人でやつて居ると、損をしてしまふかも知れませんけれども、みながその心持になつて、お互に與へようといふ心持になれば、出來ない事ではありません。

與へようといふ心持は、これは歇を無くすることで、非常に善いことであります。維摩居士の女の月上女といふ婦人が言つたことばに

慈心畢竟すれば人を畏れず

慈心畢竟不レ畏レ人。

とありますが、良い語です。本當に人に慈をかけたいといふ心持が、畢竟するといつて始めから終ひまで貫いて居るならば、人ナンといふものは怖くはありはしない。どんな惡い者だつて、こつちが本當の慈悲の心持を有つて居れば、向ふが恐ろしい事をやるものではない。若し恐ろしい事をやるとすれば、まだこちらの慈悲が足りないのである。慈心畢竟すれば人を畏れるものではない。これはまことに良い語であつて、吾々はどうも慈心が畢竟しない、少しは可哀相だと思ふ位のことはあるけれども、どうも畢竟しないものだから、やはり世間中が怖いのですけれども、慈心畢竟すれば結局人を畏れないでせうこれほど大きい事はない。

それが所謂布施——人にめぐむといふ行ひになつて現はれるときに、その布施をすることが、やがて自己を佛の境界に一歩々々と、近づけて行く效果を來すのであります。それで佛道に回向して、三界に類の無いところの佛樣がお歎めになるやうな覺を開いて、そんな善い境界に行きたいものだと望んで居る者もある。これが佛道修行の一つの大事な方面であります。

これから以下ズッといろ〳〵な方面から佛道修行の道が說かれて居ります。前に申すやうにその人の

境遇、事情などに依つて、修行の道は違ひましても結局正しい修行の道を歩いて行けば、行き着くところは同じ所に行けるのでありますから、自分に縁のある修行の道を選んで、それに全力を注ぐやうにありたいものだと思ふのであります。

（第八講了）

謹告

本多日生上人の蓄音器レコード品切れの處、今回大犧牲を拂ひ最新式の方法を以て複製致し、左記の通り頒布仕候

「佛教の信仰」

兩面二枚壹組　印刷物添付

金參圓也　送料金貳拾五錢

東京市小石川區音羽町六丁目十七番地

財團法人　統一團

振替東京九四二〇番

電話牛込五三三六番

記事と教報

佐藤錄太郎中將勅選議員　先般貴族院議員勅選の發表に際し、佐藤中將と松井博士のあつたことは法國の大なる慶幸とせねばならぬ。ある意味からしてそれは日生上人の冥護の然らしむる處なる歟……、七月十七日日比谷松本樓に、同廿五日三信ビル東洋軒に於て共に盛大なる祝賀の宴が張られた双方共豫想より二割三割も多く來會された事は、又以つて閣下の德望の一端を窺ふに足りるであらう。

汎太平洋佛青大會　七月十八日新裝の築地本願寺に於て、大平洋を繞れる十三ケ國の青年佛教徒の大會が開催され、民族國風を異にせる男女が、佛陀を中心に莞爾として人類文化への貢献を圖らんとした。會長柴田一能氏はこの大會の二大使命として、その一は佛青聯盟に於て佛誕二千五百年を記念に世界的進出を圖ることと、他の一は佛教精神で國際平和に貢献したいとの意味を述べ。總裁大谷尊由氏は第一實行性に富めるもの、第二國際性を有するもの、第三社會性を具へたものが充分に討議し、今後確實に履行して行く所に大會の文化的意義が完了せられるものであると信ずる旨を以て挨拶とし。又來賓側から松田文部大臣は佛陀の名に於て民族相互の精神的融合を圖るべきことを望まれ。重光外務次官は各位が協力して佛教本來の使命を發揮されたいと述べられて居た。

吾人はかゝる好機に際し、それが單なる一過の辭禮に、又部内に數多き議論的の會合とせずして、實際上に深味のある意義ある權威あるものとしてほしかつた。或は無理な注文かも知れないが、何だか長蛇を逸せる觀なきにしもあらずである。

新刊紹介　小林一郎先生が、聖德太子の十七憲法こそ現代のすべての者が精讀し永く遵奉すべき寶典であるとし、大乘佛教の精神を以て妙註せられ『聖德太子の憲法と大乘佛教』と題して今回發行された　この種のものは從來見ざる所である。神儒佛三道溶融、日本文化の基本、日本精神涵養の經典として各位の要求を滿さしめらるゝであらう。發賣所は四谷區内藤町一　晉文館　定價金五拾錢　送料金四錢

新加盟者

東京市向島區寺島町　内倉治吉殿
名古屋市東區千種町　牛田共保殿
東京市淺草區壽町　安江清海殿
同　同　駒形　本田三郎殿
同大森區市野倉町　高木鎰三郎殿

（誌友より賛助及正團員へ）

本部團報

東郷元帥追懐會　七月一日第一日曜日午後七時から、本部の講堂に於て同師會幹員出仕し本團總裁の本多日生上人と法縁の厚かつた東郷元帥の尊靈を弔ひ、八時より日露大戰中三笠艦の墓碑中現在唯一人者であらせらるゝ飯田久恒中將から『天佑と東郷大將』と云ふ題下で、二時以上に亘つて從來殆んど耳にすることの出來なかつた旅順方面のお話や、東郷大將と乃木夫人との接見された時の調話を聽いて、團員のみならず、音羽町會並に在郷軍人等滿堂の人々に甚大な感動を與へられ、小西日喜師閉會の挨拶後も暫時散會されぬ程であつた。

盂蘭盆精靈祭　『孝慈を行ずる者は皆悉に所生の現在父母、過去七世の父母の爲に七月十五日、佛歓喜の日　僧自恣の日に於て百味の飲食を以て盂蘭盆中に安じて十方の自恣僧に施すべし』と盂蘭盆經の一節に教へられて居る。此日午後七時から同師會幹員總動員で、精靈祭を嚴修し、諸先師、各團員先亡後滅の精靈、百數十の法報された戒名をば、梶木顯正師一々鄭重に讀みあげて其間百餘名の參詣者焼香され、薫香たかく堂に充ち心身の清淨を覚えしめた。漸く八時法要を終り、引續いて講演に移つた。磯部滿事氏は日蓮聖人の『盂蘭盆御書』を拜讀し閉會の挨拶を述べ、小林一郎先生は『現代の宗教生活』と題して、今の苦難時代こそ特に法華經の明教に基いて我等の生活を光あり力あらしめたいものである云々と其妙辯を以て、講堂の窓外に聲る人々にも下種された。終つて恩師日生上人の『佛教の信仰』が蓄音器を通して滿堂の人々の肺肝を强く銘した。最後に河合彭明氏の閉會の辭で九時四十分散會。來會者に『勤行作法』並に『日蓮聖人の日本精神運動』各壹部宛御供養した。

法華經講座　七月二十六日から八月三十日迄暑中休講、九月六日の第一木曜日午後七時から再開の豫定。

日曜日勤行と法話　毎週繼續されて居た此集會も八月は暑中休として各位の御健勝を祈る。

横濱教誌

當地六月中の集りは左の如くであつた。

○四　日夜　神奈川區篠原町西村氏方にて「閻家の成佛」　磯部先生。

○八　日夜　磯子の高橋氏方にて、小西師の御話。

○九　日夜　神奈川の岩井氏方にて小西師の御講話。

○十二日夜　神奈川區鶴屋町京田氏方にて

○十三日　午後三時程ケ谷區峯岡町平岡氏方にて、夜は引續き中區高田氏方にて、小西師、磯部先生の御法話。

○十六日夜　神奈川區榮町石毛氏方にて和賀師の御法話。

○十八日夜　神奈川區三ツ澤岩上氏方にて小西師、東京より御來話。

○二十四日夜　磯子の稻葉氏方にて「松陰先生と日蓮聖人」磯部先生。

○二十七日夜　神奈川區三ツ澤齋藤氏方にて小西師磯部先生の御法話。　以上

寄附金維持及團費誌料領收

（自六月二十一日　至七月二十日）

一金拾圓也　東京　井上道太郎殿
一金貳拾九圓貳拾壹錢也　名古屋　豐田式織機株式會社殿
一金壹圓也　東京　加藤重太郎殿
一金壹圓貳拾錢也　同　土屋　喜久殿
一金貳圓五拾錢也　靜岡　竹内　ぎん殿
一金貳圓貳拾錢也　津山　玉置　留男殿
一金貳拾圓也　東京　某　氏殿
一金壹圓貳拾錢也　同　西村　正殿
一金壹圓貳拾錢也　青森　柏木　吾市殿
一金壹圓貳拾錢也　東京　長岡　義貫殿
一金壹圓也　同　小峰　豐子殿
一金貳圓五拾錢也　同　内倉　治吉殿
一金六圓也　靜岡　玄妙寺殿
一金貳圓五拾錢也　名古屋　牛田　共保殿
一金壹圓貳拾錢也　東京　松波　たま殿
一金貳圓貳拾錢也　同　淺邊　清吉殿
一金貳圓五拾錢也　横濱　鈴木　二光殿
一金壹圓五拾錢也　東京　柳下　日寶殿
一金五拾錢也　同　日下部二葉殿
一金貳圓五拾錢也　同　安江　清海殿
一金參圓也　同　大河原　徹殿
一金貳圓也　千葉　中村正治郎殿
一金貳圓也　東京　大久保　龍殿
一金壹圓也　横濱　岩澤　理八殿
一金壹圓貳拾錢也　大阪　富田　清子殿
一金貳圓五拾錢也　東京　本多　三郎殿
一金拾圓也　同　井上道太郎殿
一金貳圓也　東京　沼部彌太郎殿
一金拾圓也　同　小林　長次殿
一金五圓也　同　高木鎗三郎殿
一金壹圓貳拾錢也　同　青山　信市殿
一金拾圓也　千葉　立正會殿
一金貳圓貳拾錢也　ホノルル、小林日稱殿
一金拾圓也　東京　菅川　日堂殿
一金四拾八錢也　大阪　山乃神傳道團殿
一金壹百圓也　横濱　岩上治三郎殿
一金五圓也　廣島　村上　信夫殿
一金參拾圓也　東京　横山　正三殿
一金壹圓貳拾錢也　千葉　並木　博殿

右雜有入帳仕候

財團法人統一團會計

統一定價
一冊　金貳拾錢　送料壹錢
半ケ年　金壹圓貳拾錢
一ケ年　金貳圓貳拾錢　送料共

注意
▲御申込ハ總テ前金ノ事
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可致候
▲御轉居ノ場合ハ必ズ新舊共直ニ御通知ノ事

昭和九年七月廿四日印刷納本
昭和九年八月一日發行
（第四百七十三號）

東京市小石川區音羽町六ノ一七
編輯兼發行人　磯部滿事
印刷人　鈴木日雄
東京市品川區南品川二ノ一八一
印刷所　都印刷所
電話高輪六〇二四番

不許複製

東京市小石川區音羽町六丁目一七
發行所　財團法人統一團
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番

目次

佛教の信仰……日生上人
日蓮教學講座（第十二回）……河合陟明
日本精神運動と聖日蓮（中）……和賀義見
法華經講話（第九講）……小林一郎
記事
○團報と教信
○寄附團費誌料領收

第三十九年九月號